

無名峰

1995年12月

創部25周年記念誌号

日本福祉大学Ⅱ部山岳部

目 次

記念誌の発行に向けて	1995年度部長	田口 剛	1
記念誌発刊によせて	O B 会長	高橋憲常	2
山行記録 (1983年～1995年度)			3
アルバムから			6
寄稿			14
徒然帳から			54
資料：95年度方針			68
日本福祉大学Ⅱ部山岳部O B・OG住所録			76
日本福祉大学Ⅱ部山岳部現部員住所録			80
編集後記			81

記念誌の発行に向けて

田口剛

私たちの二部山岳部が1969年に創立されて今年で26周年になります。本来なら昨年度発行されるはずの記念誌が1年遅れてしまったことをまず、この場をお借りしてお詫び申し上げます。発行に関して今年度に入ってからOBの方と何度か打ち合わせが行われ、6月に行われたOB、OG会で確認されました。その後、編集委員会を週1回行いながら、月一回、OBの吉岡さんと打ち合わせを行ってきました。昔の先輩方の山行計画書を見ながら、部員の多さとレベルの高さに驚き、古い徒然帳を見れば、今と同じ様なことで悩んでいたのが読みとれたりして、非常に興味深かったです。現在、私達の活動は無雪期の縦走が主な活動となっており、積雪期の登山は冬合宿位です。岩登りは個人で取り組もうとしている人はいるのですが、部全体の取り組みとしては行われていません。一度なくなった活動をまた始めるのはそれなりの困難があります。しかし、この二部山岳部を創立された先輩方の苦労に比べたら困難と呼ぶに値しない程のものでしょう。

私が入部してから3年近くになりますが、その間だけでもずいぶん装備が変わりました。ホエーブスがなくなり、コールマンもあまり使わなくなり、今はEPIガスを多用しています。先輩方からみればもっと変わっていると思います。社会環境も変化しているでしょう。様々なものが変化している中、相変わらず山に登っている二部山岳部のなかで、受け継がれているもの、受け継ぐべきものはいったい何なんだろうかとかんがえています。

最後になりましたが、この記念紙発行に向けて金銭的、精神的な援助をしていただいた諸先輩方にお礼をのべたいとおもいます。

記念誌発刊によせて

O B会長 高橋 憲常

記念誌の発刊おめでとうございます。そして、作成に携わりました現役、O Bの皆様の大変なご努力に深く感謝いたします。また、25年間の山岳部の歴史を築き、支え、ご協力していただきました全ての関係諸氏に感謝いたします。

さて、私事ではございますが、去る6月のO B総会におきまして名古屋在住を大きな理由?に“会長をせよ”とおおせつかり、今まで長きにわたりO B会長をやってこられた、加藤康則氏の足元にも及ばない微弱な自分ではございますが、大任を引き受けることになりました。全国に散らばるO B、O Gの皆様、現役の方々、今後も不手際、ご迷惑等おかけすることも多々あることと思いますが、どうぞこの機会に副会長の川田、事務局長の吉岡ともどもよろしくお願ひ致します。

ところで、一口に25年と言いましてもその歴史は決して順風満帆ではなかったことと思います。私が在籍した1980年前後ですら、サークルの運営をめぐって何度も部内での衝突がありましたし、冬合宿ではテント内で部員が大やけどをし、参加者全員がふもとまで背負って下ろす、という遭難まがいの一幕もありました。また、装備ひとつをとっても大幅に変化しています。今でこそ当たり前のラバーソール(フリークライミング専用の靴のことです。)ですが、20年前にはなかったし、『フリークライミング』という概念がアメリカから入ってきたのもつい10数年前のことです。事実、私が現役の頃は登山靴で岩登りをするのが当たり前でした。最近は御在所の岩場でもとんと見かけません。“ゴアテックス”の雨具?…昔は“ゴム引き”だったし、“ペミカン”? “キスリング”? …そんな言葉は今では死語となっています。

日本の高度成長の真っ最中、大阪万博のあったころⅡ部山岳部は生まれたようです。そして先輩から後輩へと脈々と受け継がれた活動は、運々としながらもまがりなりにも【伝統】一この言葉を使うのが少し恥ずかしいのですがーをつくり、こうしてささやかな記念誌としてその歴史を振り返り、表現することができるまでに至りました。

O Bの皆様のなかには今だに現役バリバリに山行をこなしている方も何人もいますし、日々の忙しさのなかにも山への憧れを抱き続けている方もきっと大勢いることでしょう。現役の方にも山に魅せられ、山一筋の部員もいるかも知れません。“親睦”もたしかに大事なことではございますが、忘れてはならないことは、O Bと現役をつなぐ橋、O Bどうしが出会った橋にはすべてそこに“山がある”、“山があった”ということではないでしょうか。寺山修司の『書を捨てよ、町へ出よう』ではありませんが、時には『仕事を忘れ、山に行こう』ではありませんか!

山行記録=クラブ企画山行=

(1983年度～1995年度)

1983 (S58) 年度

期間	山行目的	山域
4/18	オープン山行	藤原岳
5/15	新人歓迎山行	积迦ヶ岳
6/5	清掃山行	御在所
11/12～ 13	四者山行	御在所
11/14～ 16	雪上訓練	富士山

1985 (S60) 年度

期間	山行目的	山域
6/2	清掃山行	御在所
10/14	オープン山行	入道ヶ岳
10/27～ 28	四者講習会	御在所
11/22～ 24	雪上訓練	御岳

1986 (S61) 年度

1984 (S59) 年度

6/3 12/15～ 17	労山・オープン 雪上訓練	御在所 富士山
---------------------	-----------------	------------

6/1 10/19	清掃山行 清掃山行	御在所 竜ヶ岳
--------------	--------------	------------

1987 (S 62) 年度

6/7	清掃山行	御在所
8/3~7	夏合宿	鎌ヶ岳
10/3~4	清掃山行	南アルプス
		白峰三山~縦走~
10/10~11	新人企画山行	竜ヶ岳
10/17~18	四者企画山行	竜ヶ岳
10/25	オープン山行	伊吹山
12/27~30	冬合宿	南八ヶ岳~赤岳~

1988 (S 63) 年度

5/1~4	春合宿	中央アルプス 木曽駒・檜尾岳
6/5	清掃山行	御在所
8/14~18	夏合宿	北アルプス 穂高・槍
9/14	新人企画山行	入道ヶ岳
12/31~1/3	冬合宿	仙丈ヶ岳

1989 (II元) 年度

10/10	オープン山行	竜ヶ岳
-------	--------	-----

1990 (H 2) 年度

--	--	--

1991 (H 3) 年度

6/2	清掃山行	御在所
9/23~24	新人企画山行	奥三河 明神山
10/19~20	四者山行	御在所
12/25~28	冬合宿	南八ヶ岳 (阿弥陀・赤岳 横岳・硫黄岳)

1992 (H 4) 年度

5/3~5	春合宿	鈴鹿 (雨乞~釧 迦)
5/31	新人歓迎・オー ープン山行	竜ヶ岳
6/6~7	清掃山行	鎌ヶ岳~御在所
7/31~8/5	夏合宿	南アルプス (甲斐・岐・北)
10/4	オープン山行	入道ヶ岳
11/22~23	雪上訓練	中央アルプス (仙丈敷)
12/24~27	冬合宿	南八ヶ岳 (穂・岳・附穂)

1993（H5）年度

5/9	オープン山行	藤原岳
5/30	新人歓迎山行	霊仙山
6/6	清掃山行	御在所
8/2~7	夏合宿	北アルプス (剣岳・双六岳・薙岳)
10/3	オープン山行	鎌ヶ岳
12/23~	雪上訓練	中央アルプス (千疊敷)
24		南アルプス
12/24~ 28	冬合宿	(千丈岳)

1995（H7）年度

5/21	オープン山行	小倉山・養老山
6/4	清掃山行	藤原岳
6/6	新人歓迎山行	釧路ヶ岳
7/31~8 /5	夏合宿	北アルプス (剣岳・常念岳・大天井岳) 勘岳
10/15	オープン山行	入道ヶ岳
11/2~3	新人企画山行	雨乞岳
12/24~ 28	冬合宿	南八ヶ岳

1994（H6）年度

5/29	オープン山行	入道ヶ岳
6/5	清掃山行	藤原岳
7/30~8 /4	夏合宿	南アルプス (観音岳・白糸山)
10/16~ 17	新人企画山行	御在所～鎌ヶ岳
10/30	オープン山行	竜ヶ岳
12/24~ 27	冬合宿	南八ヶ岳 (阿蘇岳・赤岳・藏)

※お断わり

過去の山行報告書等から主なクラブ山行のみ掲載していますが、抜けている年度につきましては、資料が見つけられませんでした。

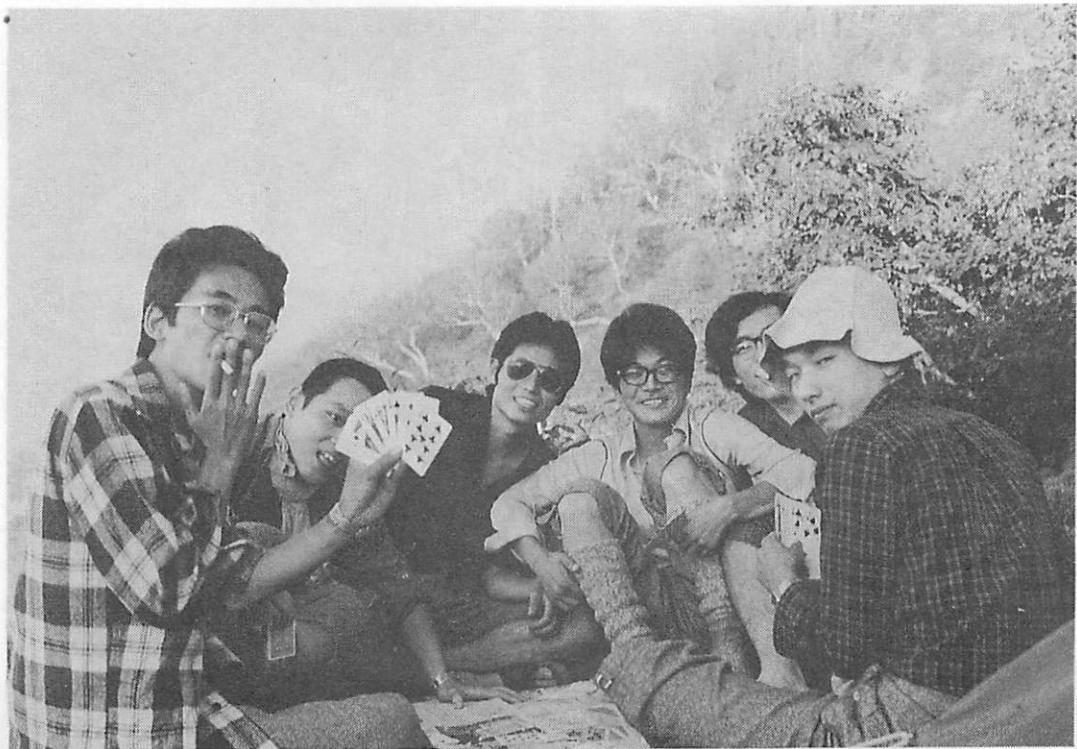
アルバムから



1994. 夏合宿



1977 (S 52) 晩秋 伊吹山ボッカ



1978 (S 53) 8月夏合宿（男子）

早月尾根～剣山～仙人池



1980. 9月28日 入道ヶ岳 オープンハイキング



1981. 8/9~8/23 夏合宿 後立山 剣
函人岳～山陰一掛原～早



1981. 7/24~26 槍ヶ岳



1982 夏合宿 北岳



1982 夏合宿 北アルプス裏銀座



1982 夏合宿 北アルプス裏銀座で



1987 北岳山行

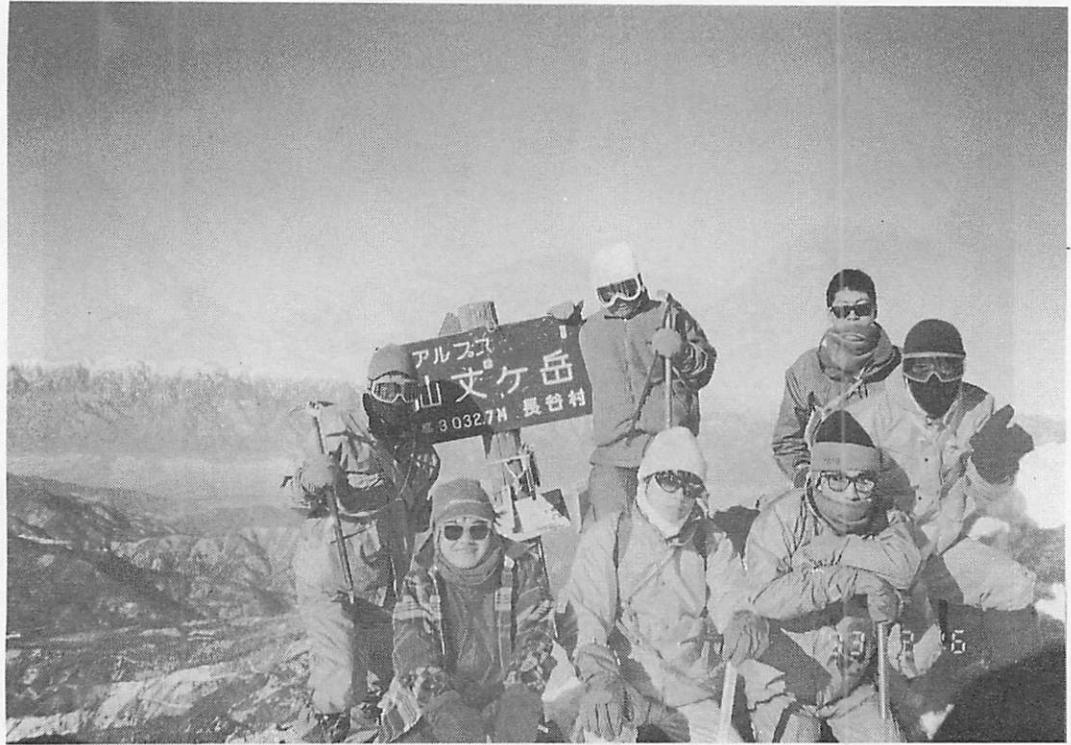


1992. 9月 槍沢の登りを行く。苦しくも、楽しい時である。

式へ底地もモモアコ園みさづるお前へ君アセリ身被羅音



1993. 10月 奥穂高岳より、西穂ジャンダルムを望む。（見るだけ）



1993.12月 冬合宿 冬の3000mだよ～ん。
行程が長いって行く前はとても心配してたけど良かった。



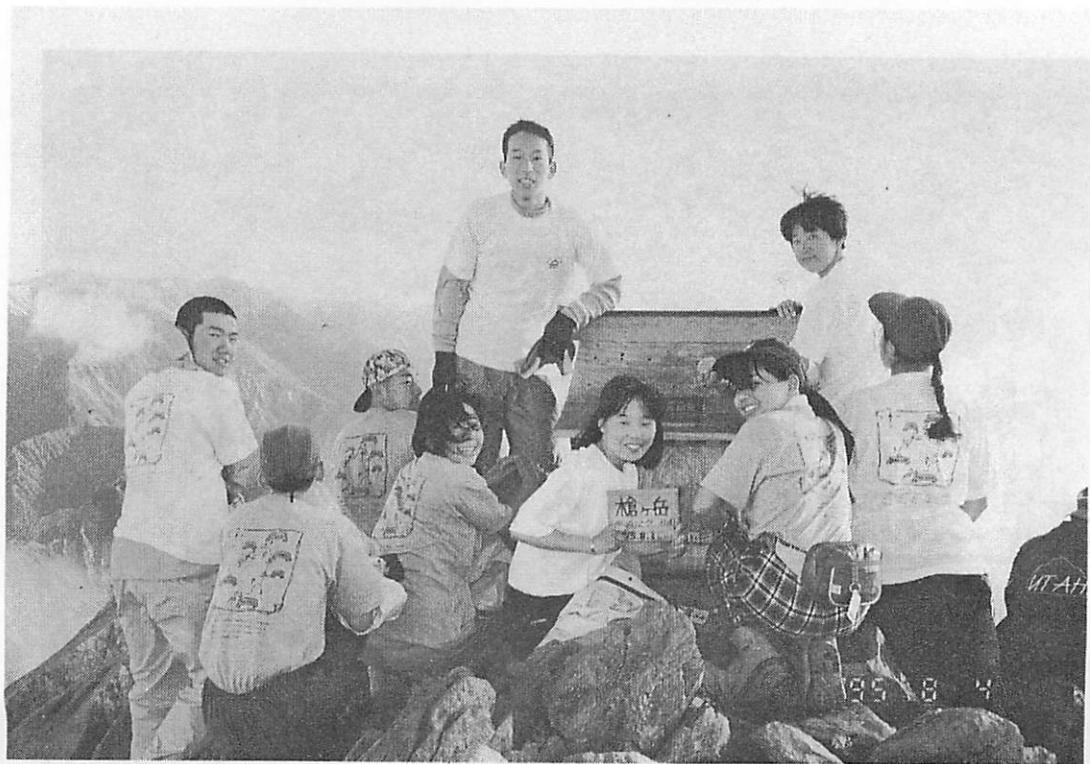
1994. 竜ヶ岳 秋のオープン山行 山岳部特製豚汁おいしかった～！！



1994. 10 秋のオープン山行

↓ (八四)

この写真は「山溪」10月号の表紙に使われました？



1995年 夏合宿 “みんなでおそろいのTシャツを着て

「槍ヶ岳の頂上であ～やりやりだ」 (By 山本)



1995年 6月 知多郡南知多町 レシア歓迎て 25周年を祝う会



(本山セ日) [次回予告中～あり土期の間で]

寄 稿



1994.5 乗鞍にて プロのカメラマンに指導され一眼レフで。

紀 行

奥利根／宝川水系ナルミズ沢 上 越／巻機山米子沢

—1995年夏 上越の沢遡行記録—

高橋 憲常（81年卒）

山への意欲は溢れるほどあるのに山に行けていない。4月までは週末毎の雨のため何度も山行が流れ、5月の南アの合宿ではアプローチの崖崩れに遭遇して、急遽行き先を変更した。7月は夏風邪をひいて10日近くも寝込んでしまった。別に山が逃げて行く訳ではないのにチャンスや体力はどんどん逃げて行ってしまう。自分はどんな山がやりたいのか？沢登りなのか岩登りなのか、それとも百名山か海外登山か、これといった目標もないまま時間を浪費していっている。大きな目標が欲しい…と思う。氷河を抱くヒマラヤの高峰や奥深い山ひだを縫ってとうとうと流れる大渓谷…まだ見ぬ山々の憧憬は果てしなく続く。

◇ 奥利根／宝川水系ナルミズ沢 1995.8.4-5

ここ数年来、上越方面の沢が気にいっている。近郊のめぼしい沢をおおかた登ってしまったこともあるが、上越のスケールの大きな沢に引かれてしまう。大峰、台高に入るよりも上越に入りたい。昨年は釜川右俣、武尊沢、恋ノ岐川を遡行しイワナの美味さを知った。腹一杯イワナの塩焼きを食ってみたい！暑さを忘れて水と戯れたい！そんな願いをこめて上越に向けて出発した。

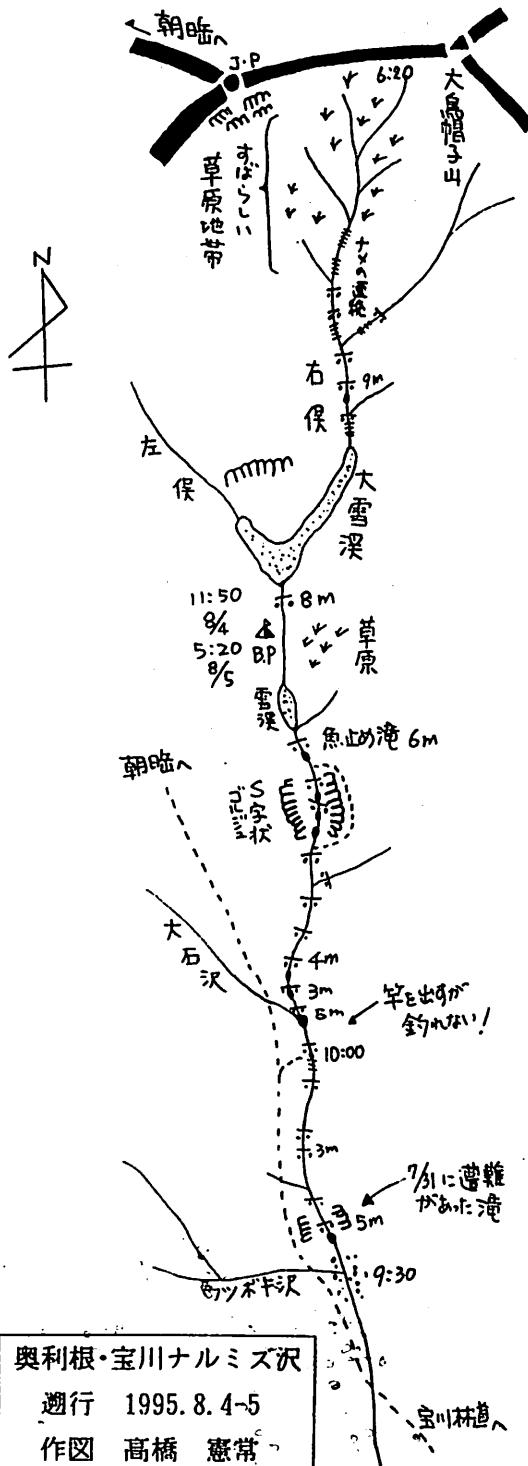
ナルミズ沢はつい最近までは忘れられていた沢だった。しかし、今夏、雑誌『岳人』に紹介記事が掲載されてからは状況は一変した。宝川林道最奥にあるこの沢に毎日のように沢屋が押しかけ、私達が入渓するつい3日前には3人の遭難者を出してしまったことは記憶に新しい。幸い今回の山行では2人の釣師以外、人に会うこともなく静かな遡行が味わえた。

林道の車止めゲートにある民家の主人と人悶着（釣師ともめるので沢登りは迷惑だと言われた）はあったものの予定通りうだるような熱さの中、ナルミズ沢に向けての林道歩きが始まった。2時間の林道と登山道歩きでウツボギ沢出合いでた。そこに“一番会いたくない”釣師がいた。これから遡行だというのに何と運が悪いことか。聞けば大石沢出合まで釣り遡るということであり、下部の遡行をバスするのは残念であるが、大石沢までは登山道を行くことにした。沢は誰のものでもないが、もめるのはもっと気分が悪い。昨年、

大菩薩の小室川谷で釣師と一発触発の状態になったことがあった。これはいまだに後味が悪く、それ以後はできるだけ釣師とのトラブルは避けるようにしている。

登山道を途中から沢に下り、大石沢手前の淵で竿を出すが何も釣れない。伊藤さんが毛針、私がキジ（ミミズ）で攻めるが、魚影が薄いのか、腕が悪いのか、今夜のおかずが上

がってこない。大石沢を過ぎるとナメや釜をもった滝が連続するようになり、時折、魚影がはしる。S字状ゴルジュを右のブッシュから巻き魚止めの滝（10m）を左岸から直登すると雪渓が現れる。それを越えるとすぐに広いゴーラーとなり、いたるところに流木が転がっている絶好のビバークサイトになり時間は早いがツエルトを出した。



翌早朝、大雪渓が残る二俣から右俣に入る。雪渓は延々と続き、時折パックリと口を開けたクレバスが不気味だ。ズタズタの雪渓を細心の注意を払いながら登る。時々、大音響とともに巨大な雪のブロックが崩れ落ちる。今回のルートのなかで一番緊張した場所である。

雪渓を過ぎるとナメ床状になり、水量も乏しくなってくる。見渡せば広大な草原と朝日岳に続く稜線、そして名も知らぬ高山植物。ヤブ漕ぎもないまま、源流から草原をぬけて稜線に飛び出す…まったく見事なセッティングである。

稜線から朝日岳へは谷川岳の一ノ倉沢の岩壁を眺めながらゆらゆらと歩く。ニッコウキスゲの黄色が目に鮮やかだ。上越の山々も“今が夏”、“今が旬”なのだろうかと思いつながら、乾杯のビールの酔いも手伝ってしばらく頂上でまどろんだ。

〈コースタイム〉

8/3 名古屋 21:30 宝川温泉 3:00 車止めゲート 3:20 (仮眠)
8/4 (晴れ) 出発 7:30 ウツボギ沢出合 9:30 魚止め滝 11:30 二俣手前ビバーク
地 11:50 (泊)
8/5 (晴れ) 起床 4:00 出発 5:20 穂線(ジャンクションピークと大鳥帽子山の間)
6:20 朝日岳頂上 7:20~8:20 車止めゲート 11:30
※メンバー 高橋憲常、神谷幸志 (名越ACC) 伊藤政義、山本達也 (重説会)

◇ 上越／巻機山米子沢 1995.8.6

当初の計画ではナルミズ沢を遡った後、谷川連峰の平標山南面に突き上げる笹穴沢を遡行しようということになっていたが、計画がコロコロ変わるのがこのメンバーの常、今に始まることではない。谷川岳の白毛門沢がいいとか苗場山のサゴイ沢にしようかと二転三転した揚げ句、結局、メンバーの内2人が行ったことがない、かの“米子沢”になってしまった。上越の沢を語るに米子沢は外せない。私は1993年の秋、冷たい雨の中遡っているが夏の真っ盛りに遡る米子沢も悪くないだろう。

谷川温泉の露天風呂で汗を流した後、食料を買い、水上から関越経由で巻機山のふもとの駐車場に入った。もちろん途中でしこたま酒を買い込むのを忘れない。シートを広げて炎天下の中、いつ終わるとも知れない酒宴が始まる。冷や奴、ギョウザ、チンゲン采と豚肉の油炒め、大盛の野菜サラダといつもの役者(つまり)が揃ってくる。時折、ブヨにくわれながら真っ暗になっても酒宴は続く。いつしか山での失敗談やら自慢話、30代(私)40代(伊藤氏)、50代(神谷氏、山本氏)の世代を越えた山仲間の宴は延々と続く…。

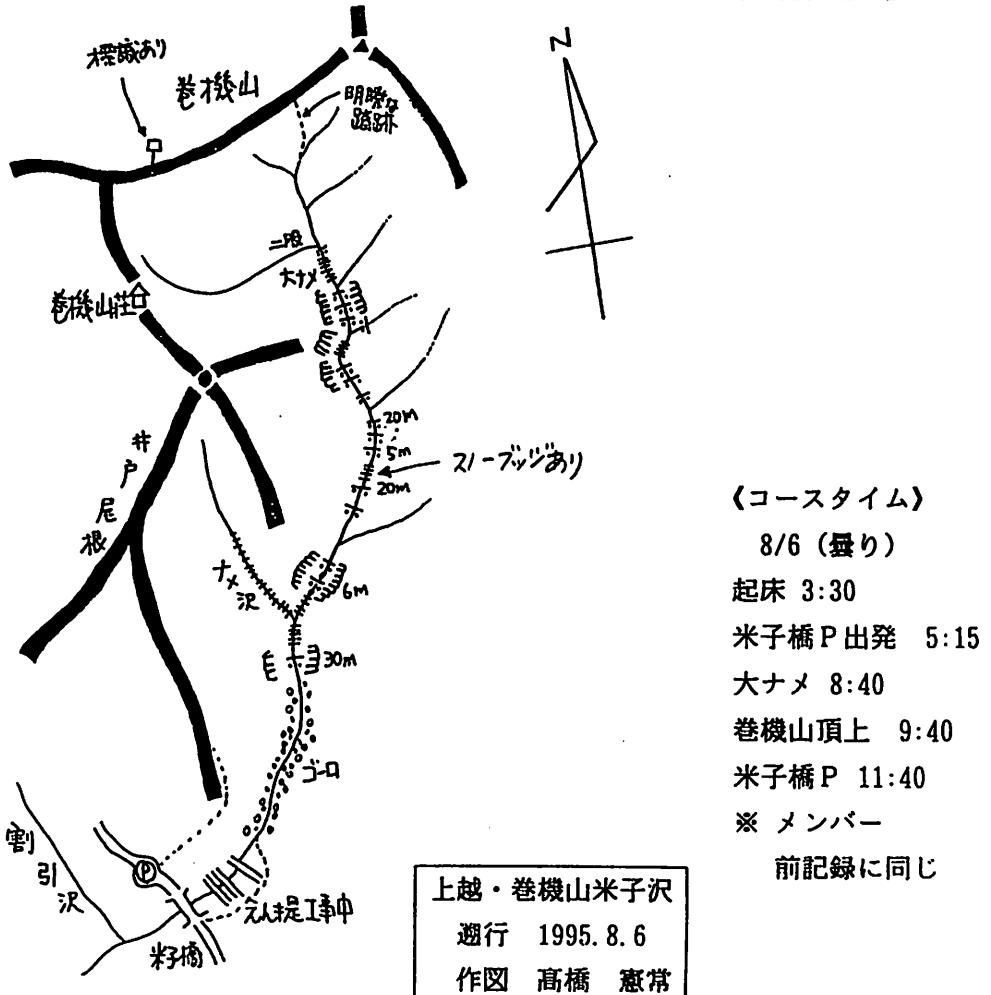
翌早朝起床。5時過ぎに出発。砂防ダムの工事現場を越える。以前来たときよりも山肌がえぐり取られ、沢の奥深くまで工事の傷痕が伸びている。それにしても何でこんな山奥までダムを造らなければいけないのか、まったく建設省がやることは理解できない。何年間かは地元の土建業者に金は落ちるだろうが、破壊された自然は二度と戻って来ないので。長良川にしきり、赤石沢にしきり、中ア随一の美渓、片桐松川でさえダムの餌食になっている。沢は年々変化する。自然の大きな力によってゴルジュが侵食され一瞬にして美しいナメ滝が埋まってしまう。これはしかたがない。しかし、人間の勝手による自然破壊はもうや止まるところを知らない。我々、沢屋にとっての受難の時代がやってきている。

さて、米子沢であるが二度目ということもあって以前のような緊張感を味わうこともなくぐいぐい遡ることができた。下部ゴルジュ帯ではスノーブリッジが残る部分もあったが、

スケールの大きなナメ滝を走るように落ちる水がほてった肌に気持ちいい。そして一番のハイライト、“大ナメ”であるが、何度も来ても素晴らしいではないか。まさに自然の造形ここに極まり、といったところか。一昔前ではワラジの感触をひたひた感じながらスリップに注意し遡ったナメも、今ではフェルト底のウェーディングシューズで抜群のフリクションを利かし簡単に越えてしまう。もはや沢登りの世界で『ワラジ』は死語になっている。古き良き道具も機能と安全性、経済性をあわせた道具には敵わない。登山形態の中でも一番野暮ったく、泥臭い沢登りの世界も徐々に進化しているといえる。ただし、進化しているのは道具であり、必ずしも沢屋の技術、マナーが向上した訳ではないのは周知の事実である。

ついつい話しが横道にそれてしまう。どうも沢登りの事となると一言いわずにほれないうらしい。大ナメを越えた後、二俣からルートを右にとり巻機山を目指す。ニッコウキスゲが咲き乱れる草原の急な斜面を抜けたところが巻機山の頂上だった。少し下った標識がある広場でビールで乾杯。真夏だというのに吐く息が白く、秋の訪れを招く赤トンボが翔んでいた。

【 高橋 記 】



山岳部時代を振り返って

木村久世（1976年卒）

学窓を離れて、早20年。まさに、光陰矢のごとしの感がしています。

私の山岳部へのあこがれは、高校の時からでした。高校のグランドで、ユニホームを着て重そうなリックを背負いリハーサルをしている山岳部員を、私は目の端にとらえて、羨望はつのるばかりでした。大きくふくらんだリックには、夢がたくさんつまっている様な気がしたからです。

親元を離れて、大学生活が始まり、生活も落ちついて来た頃、山岳部の存在が心にスーッと入って来ました。

山岳部へ入部して驚いたのは、先輩が二年生しかいなかった事でした。発足して2年目だった訳です。年功序列（？）にあこがれた処を持っている私は、何だか肩すかしを食った思いでした。でも、そこには学年の差も年令の差も感じない友達の様な交わりがありました。部室に行くと誰かいて、話ができるというのは、とても有意義でした。

何も知らない所から出発して、色々お世話になり、大方は皆の足を引っぱり続けだった様に思います。（ゴメンナサイ）

4年になり、もう一つの夢がむくむくと頭を持ち上げて来ました。それは、1人で外国を旅したい、外国の山を歩いてみたいという想いでした。フツフツと沸き上がっては、やっぱりだめだあをいう想いとの葛藤。でも、きっと行かなかったら一生後悔する、そう思っていた頃、森村桂さんの旅行記を手にした。「お金持ちでもなく、外國語がペラペラでもなく、まして美人でもない私」が行けたのだから、行こうと思えば誰でも行けるという言葉に、ビビッと電流が流れてしまったから、さあ大へん。誰も止め様がありません。まして美人でもないという所までおんなじ私は、奮起してしまったのです。

山岳部は、海外旅行準備の為、4年になってからは、実質出来なくなり、退部をした事になっていますが、OB・OGの一員に加えて頂いて喜ばしく思っています。

アルバムを見て想うこと

S 5 3 卒業 縣 武子

アルバムを見ていると小6になる娘が横から覗き込み、「おかあさんも青春してたんだね。楽しそうだけどみんな狂ってるねエ。」と言った。

いつの間にか変色してしまったアルバムだけれど、開けてみれば20年前の私たちがそのままそこにいる。

「ほんとほんと」とあいだを打ちながら胸が一杯になった。

剣岳を背にそろいのユニフォームで皆が笑っている。

ピッケルを持って得意そうにポーズをつけていたり、雪渓の中でラーメンを食べていたりする。

私が山登りをしたのは実質2年くらいだったけれど、かけがえのない時期を私はあの山岳部で過ごさせて頂いたと思う。

メンバーのひとりひとりが輪郭のはっきりした個性的な人たちで、私はみんなと登山することが楽しくてしかたがなかった。

山行中ティーバック一つから何人分もの紅茶を取り、なお次回に使おうとティッシュに包んで持ち歩いたことがある。

どこの駅でだったかボロッと落としたそれを駅員さんが拾って届けて下さった時は持ち歩いた当人共々恐縮した。

おかしくておかしくてたまらなかった。

貧乏なことは楽しく、変な人には興味深々だった。

女子だけで下宿に集まり白菜の鍋を囲んだ時、白菜の植札がスープにぶかぶか浮いてるのがおかしくて皆でげらげら笑った。

写真に写った私達はまさに「楽しそうだけど狂ってる」人そのものだ。

夜行列車に乗り、駅で仮眠を取ること。懐中電灯をたよりに夜の山に分け入ってゆくこと。雨の山肌を両手をばたばたさせて鳥になってかけ下りたこと。

今思い出しても口元がゆるんでしまう。

先輩の○○さんと××さん（女性）はテントの中で一升瓶を一本づつ抱えて酒盛りをして、まったく崩れない酒豪だそうな。

先輩の△△さんは山行中用足しに行く姿を一切見せない淑女の鏡だそうな…。

一人ひとりが伝説めいたものを持っていて、恐れたり憧れたりした。

初めて御在所岳の岩場に連れて行ってもらった時はオーバーアクションを狼そのもののように自由に行き来する素足に藁草履の怪人に心から驚いた。

「色々な人が世の中にはいる…」田舎の女子校しか知らない19才の私には見るもの知る人が新鮮だった。

宝物の箱を開けたように次々と情景が浮かんで来る。

誕生日を祝ってもらった。嬉しかった。

飲み会をした。楽しかった…。

でもいいことばかり書くと当時のメンバーのみんなからは呆れられるかもしれない。

恥ずかしく迷惑だった自分も同時に思い出して壁に頭でもぶつけたくなってしまった。

ごめんなさい。

借りたものを傷つけてしまったこと。

下山途中で足をくじいて帰りがタクシーになってしまったこと。

人の気持ちに鈍感で傲慢だったこと。

元気だけはよくてもあっちこっち未熟で結局みんなにおんぶしていたこと。

岩場をザイルで引き上げてもらったこと。

その他ちょっと恥ずかしすぎて痛すぎてここには書けない沢山のこと。など。

もし覚えていたら、そう、あのことですから、許してくださいね。…お願い。

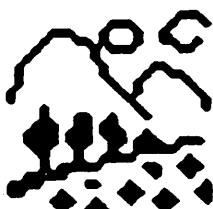
でもね、感謝しています。あの季節に。

山登りを教えてくれて、あの季節と一緒に過ごして下さったみんなに。

今振り返って見るとあのころのみんなも自分も愛しくて、アルバムを見ながら幸せな夢を見たような気持ちになりました。

大胆な寝相を披露している中二の息子と小六の娘に「楽しくて狂ってる」季節が来るのはいつのことだろう。

その時をちょっと覗いてみたい。石を投げられるかもしれないけれど。



いつもお便り下さってありがとうございます。

山岳部からのハガキには、青春の香りがする様です。

高校時代から山が好きで大学に入ったら山岳部と決めていました。福祉大に入って山岳部があったので嬉しくてすぐ入部しました。

大学1年の頃は学生寮に住んでいて、ゲタを履いて坂道を下ると学生会館でそこに2階（3階だったかな）に山岳部の部室がありました。

アビルさんやナスピさん、加藤さんやミンミンさん、ジョーさんやカメちゃん、落合さん、他にも名前は忘れてしまいましたが（申し訳ありません）個性的なメンバーが揃っていて私の大切な思い出です。狭い部室で合宿したり、山行の話し合いや学習会をしたり、用も無く立ち寄ったりしたものです。ドアを開けると、無類の山好きの人達の底抜けの明るい顔がありました。

山の道具のちょっとカビくさい匂いがブーンとしました。冗談ばっかりの楽しいメンバーで私は、いつもいつも笑いころげていました。何もわからなかったので、先輩たちがすごく大人にみえて憧れています。

山って本当にいいですよね。

いくつになってもいえ、歳とともにもっと好きになります。

5年前、ちょっと大病をして、手術をして、体力が衰えてしまいました。

それでもリュックを背負い電車に乗ると、軽い山行ですが心がはずみます。

段々に子供達も大きくなったりし、私の体力も回復しつつあるのでそろそろ、アルプスに行きたいなと思っています。

山に入ると、人間も自然の一部なんだなと、思いますよね。心がホッとなります。自分が自然の中に溶けていく様です。

三人、男の子がおりますが、一人位、福祉大に入って山岳部に入部してくれないかなと、思っています。

長男は来年、大学受験です。

三男は、ボイスカウトに入っていて、キャンプなどでの体験から山好きになってくれるかもと期待しています。

中々、華々しく山行できないのですが、細く、長く山とつきあっていきたい、です。

これからも山岳部の山行のスケジュールなど教えて下さい。楽しみにしています。みんなの山行に私の思いを重ねてワクワクしています。

今回、一泊旅行には参加できませんでしたが又、なにかの機会に是非お会いしたいです。いつもいろいろ、OB会のお世話を下さって本当にありがとうございます。これからもよろしくお願ひ致します。

頬纏 博子

『福祉大Ⅱ部山岳部との出会い』

昭和55年度卒業 猪又 康行

山岳部創設25周年おめでとうございます。25年間と言うと四半世紀、10年いや5年一昔といわれる昨今、Ⅰ部ならいざ知らずⅡ部でよく続いたなあと言うのが正直な感想です。

しかし、よく考えてみるとⅡ部だからこそ山への思いが膨らむのかなあとも思います。そう言った私も卒業してより早や15年の年月が経ちます。そして4年間の山岳部時代の思い出が、今思いかえしてみるとそれこそ山のように蘇って来ます。

私がまだ福祉大が坂中にあった頃、あの小汚い学館の山岳部のドアを叩いた時、まだ山岳部は出来てから7年そこそこのクラブでした。

当時この部室を根城としていたのは、部長だった「カンダイさん」こと粉原さん、その前と前々部長で、山岳部の建武の中興をやりとげた「ジョーさん」こと矢吹さん、そしてこのジョーさんと共に「首吊り荘」仲間だった、「理科系さん」こと加藤さん、「カズさん」こと柏原さん。方向音痴の「トンちゃん」こと賀川さん、山行中泣き通しで鈴鹿の夜間山行を一人でやりぬいた石坂さん、ミス着物の佐藤さん、滝谷で落石をアゴに受けてへりで救出された片岸さん、涸沢山荘のバイトを逃出したもののヘリに乗せてやるという言葉に騙されて再び舞い戻ってしまった縣さん、ランニング後胸の谷間に汗が流れ落ちるのが唯一の田巻さん、頑張屋の「ベロ」こと野村さん、中島みゆきが好きだった今は亡き「ヒラメ」こと西さん。と言った壮々たるメンバーが揃っていました。

はじめての山行はどこだっただろうか、当時の手帳をひっくり返してみるがよく分らない。おそらく仕事と授業とキャンセミと個人的な付合いなどで、前半は真面目な部員ではなかった様な気がする。夏の合宿（槍～双六岳～野口五郎岳）参加の為に、当時勤めていた大学堂（鶴舞の古本屋）のおばちゃんと喧嘩をした覚えがあるのだが…。合宿の山行では、三俣蓮華頂上付近で漏れ鼠になり寒さの為震えが止まらず、着ていた木綿のアンダーシャツを脱ぎ直接毛のセーターを身につけて一心地した事が忘れられない。

当時、ジョーさんや片桐さんを中心に岩登りを行い始めた。当時の山岳部の登攀ゲレンデは御在所岳藤内壁だった。他に定行寺の岩場、鳳来寺の岩場にも何回か行った覚えがある。しかし、何と言っても思い出深いのは藤内壁だ。湯の山温泉のバス停からの道を何十回往復しただろうか。大抵、夜のうちにテン場に着き酒を飲んでの宴会になる事が多かった。目や身体で道を覚えると言うより、足の裏で道を覚える事が出来た最初の経験の場でもあった。特に一壁はルートが右による程難易度が増した。当時のⅡ部山岳部では、左トラバスルートをトップで登れば、とりあえず岩は一人前と見なされた様な記憶がある。同じ御在所でも、前尾根と聞くと気分は快適で前夜の酒が進み、中尾根だと少し緊張感があり、バットレスあたりだと少し胸が重たく、一壁の左トラバスや右トラバスと言う事に

なると、もう明日は明日の風が吹くとばかりに焼け糞になっていた様に思う。

先日の25周年の会での話によると、奥のテスト岩が崩れ、バットレスの岩も崩壊が著しいとの事、前尾根の1ピッチ上の木が折れてしまったり、左トラバスの浮き石が落下してしまった事は知っていたが、大自然の営みの移り変わりや時の流れの速さを改めて感じさせられた。

私にとって御在所の岩場との出会いは、山岳部の前に所属していた「奈良登攀クラブ」での冬期の岩登りから始まる。山のいろはも知らない時にいきなりアイゼンを履かされ、アイスバイルとアイスマスを両手に持たされ、ただただしゃにむに登らされた思い出の場所でもある。そして一壁のルートを前に登っていたパーティーが滑落、スノーボートと共に藤内小屋まで降りてきた記憶が、今では霧に霞んだような状況で記憶の底に残っている。

当時の私の心はとても複雑だった様な気がする。いつ滑落して死んでもいいように、出発前は部屋をきれいに掃除をし、下着をいつもきれいな物に変えて出かけた。岩が怖くもあり、魅惑的な存在でもあった。登攀クラブのホームゲレンデは、赤目四十八滝の奥の尾根を越えた小太郎岩だった。下の道から見上げるライオン岩の雄姿が今も目に浮かぶ。下部はアブミの掛け変えの人工だが、上部がフリーになるルートが多く気持ちの切替えが微妙な所があった。そしてピークで吸う煙草の旨かった事。小太郎岩の左ルート上部で、いやらしい部分があり、手を離せないと言う心理状態が働いたからなのか、そのまま右手の指がつてしまい、つった状態が逆に身体を支えるという結果になって助かったという事があり、人の生命に対する無意識の力を感じさせられた事もあった。しかしながら、当時は常にパーティーのお荷物状態だった。「縦走から厳冬期の山を含めたオールマイティーの山を目指す」と言う言葉に軽い気持ちで乗ってしまったのだが、ゲレンデ通いはまだ楽しかったし…、夏の剣の岩場あたりまではついて行けたが、厳冬期の滝谷、八ツの大同心・小同心、谷川一ノ倉沢あたりになると、もう恐怖の絶頂で海外に行こうと言う話もうわの空と言う感じ…。調度名古屋の福祉大に入ると言う時期と重なり、登攀クラブは退会したが、その時のメンバーの人達はどうしているのだろうか、山の食糧は常にインスタントラーメンかジフィーズばかり、福祉大の山岳部に入り食糧の豊富な事とペミカンなるものの存在に驚ろかされた記憶がある。

今から考えれば、登攀クラブのメンバーは先鋭的な人ばかりだった。常にヘルメットの裏にはポックリ寺のお札を貼っていたし、結婚したら退会という規則もあった。

しかし、私にしてみれば目の前にあったのは山の楽しさではなく、山の厳しさ、恐ろしさ、そして冷たい魅力的な力だった。

正直に言って、福祉大の山岳部に入ってホットした：山はまず楽しむものだ、と言う事を教えられた。私の山に対する選択の仕方が間違っていたとは思わない。しかし、最初の山との出会いが、楽しむ余裕もない先鋭的な岩中心のものだけだった為、私の心のどこかにマイナスの要因となってしまった事は否めないと思う。

今になって思うと私のような人間は、始めはⅡ部山岳部のような山を楽しむ山行から序々にグレードを上げていけば良かったかなと考える。しかし、自分の存在を何か大きな力にぶつけたいと言う気持ちは若さの特権かなともいまさらながら思うが、ただ自分の力を知らなかつたと言う事になるだろうか。

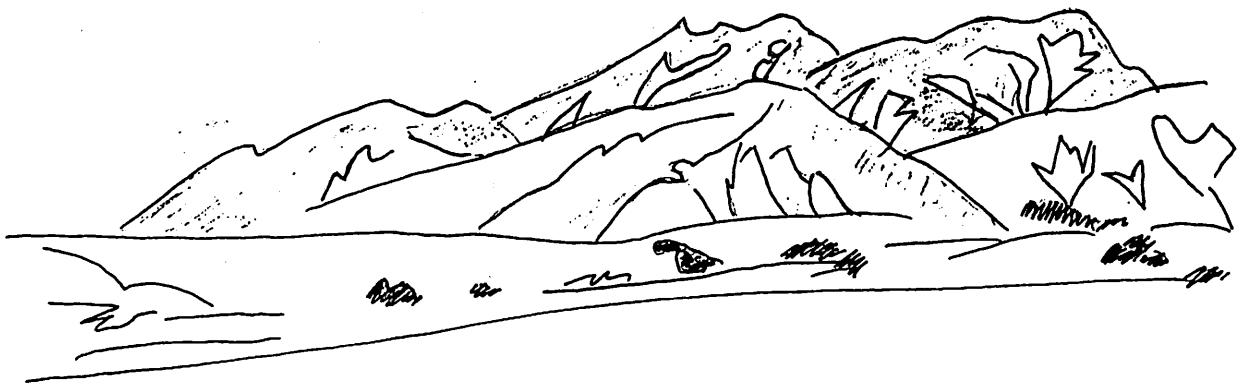
福祉大卒業後は、年2～3回のローペースでの山行を行っているが、登攀クラブ時代のただただ、先輩の後姿についていく状態から、山岳部で2年時より逆に後輩を引張って行かなければならなかつた経験を通じて、ようやくに「自分の山」が見つかりかけたと言うことが一番の収穫だったと思う。

先日、山岳部創設25周年の総会のなかで、高橋がOB会の会長、川田が副会長、吉岡が事務局長に選出された。OB会の流れのなかでは、阿比留さん、矢吹さん、加藤を中心とした古参グループと、今回役員に選出された中堅グループと、現役の部員を含む新しいグループとが一つになって、互いの交流、情報交換、支援体制の確立などが作りあげられていくことを願っている。今回の「祝う会」を企画・運営した、加藤さん、坪山、山崎、川田、吉岡、そして現役部員、ほんとうにご苦労様でした。今回の「祝う会」がよい意味でのターニングポイントになる事を祈っています。

そして、私にとってのⅡ部山岳部との出会いとは、いろんな人がいて、いろんな山が在って、いろんなアタックの仕方がある、と言う事をこの様々な人や山との出会いを通して学ぶ事が出来たことだと思う。そして何より私の心象風景の中に常に山が在る、という事を私の生涯を通じて言い切れることが出来る自信が持てるようになったという事が何よりの宝だと感じているこの頃です。

おそらく今後一人でテントを抱えて山に遊んだり、子供と共に山も増えてくると思う。友と山を讃で語らいながらの山行も出来たらなあと思っている。

そんな山を好きにさせてくれた福祉大の先輩や同僚、後輩に改めてお礼を言いつつ私の拙い文章を終えることにします。



愛らしい花、かわいい小鳥たちを見せてあけたい、

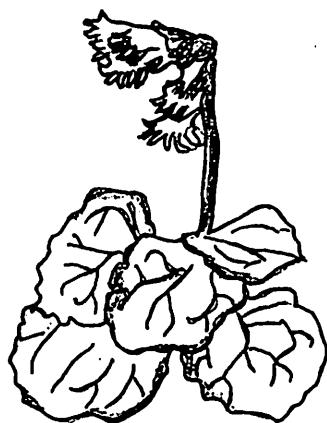
川のせせらぎを聞かせてあけたい、

今に落ちてきそうな満天の星空を見せてあけたい、

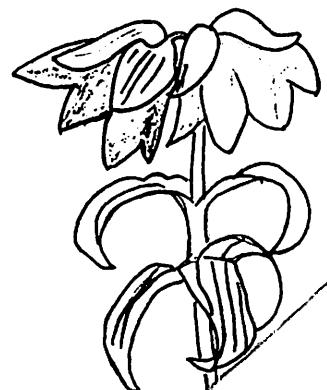
手がちぎれそうなどろぬたに、川に触れさせてあけたい、

山のにおりをかがせてあけたい、

私の小・二女娘に……



森千恵子



(カドバン)

大切な「山」との付き合い

井上 覚



はじめに

私は、日福大Ⅱ部山岳部に、九七六年四月から一年間所属していた。ただ、六九年の創部というのは知らなかつたし記憶にもなかつた。しかし、そうすると、今年九五年はすでに、五周年を過ぎているが？ まあ、いいかあ、せつかくの機会だし、過去の高校時代に始まつた山岳部の現役、それ以前の「山ザル」時代に少しだけ――。

* * *

一〇代後半まで、私はおよそ都会生活には縁遠い「山ザル」だった。中國山地の広島のある山里を生活圈として、想えばのんびり過ごしていた。一一歳の時、当時、国民休暇村やスキー場などの姿形は全くなくて、観光・登山客を受け入れる商業施設さえも殆どなかつた。そんな郷里比婆郡の、国定公園内「吾妻山（一二三九点）」の登山で初めて「山頂」に立つ経験を味わつた。それから数年後、友人に誘われて入つた高校山岳部で、鳥取・大山（一七二九点）や県内の山々を歩き、七三年が三重・大杉渓谷、七四年は福岡・英彦山系（二二〇〇点）へ全国競技登山大会に二回チームで選抜され参加した。

その後、この時期に人生の大きな挫折があつたりして？ 七六年四月、名古屋市昭和区へ居を移し、まだ地下鉄の工事前だった以中の日福人大学とほぼ同時に、こぐれたり前にⅡ部山岳部へ入部した。そして、四月の竜仙山帰りハイクの後、いよいよ入部後初めての泊まりがけ山行となる五月の大連休だ。中部山岳（〇〇〇点級の乾いた岩稜線への強い憧れが、すでに名古屋に来る 것을决定了的時点からあつた私は、どこの山城へ行くのかを部長に尋ねた。「く、「ボクらのゲレンデは、鈴鹿なんだよ」と明快であつた。しかし、すでに高校の時から、中国山地の標高（〇〇〇点級低山の標高）ばかりで泥まみれ、そんな土臭い山ばかりに登つていた（大山を除き、そんなものだつた）。だから私は、同じような鈴鹿へはちつとも行きたくない。しかも、せつかの「ゴールデンウイークだ」と、まあその当時わがままに思つたものだつた。が、それでもみんなになだめすかされ、素直に私は参加することにした。

リーダーの計画では、鈴鹿峰から越前岳まで北上する前夜発三日間の鈴鹿縦走。とてつもなくハードな山行計画だ。前日深夜、鈴鹿峰をかなり登つた所で真っ暗闇の中のテント設営。一日目、顔面スリ傷だらけの愁こぎ。二日目、ガスで視界は數メートル。景色なんぞは何も見えない。風雨はピューピューゴオーゴオ。登山靴の中までグチヨグチヨ。しかし、ズブ濡れになつても前述あるのみ。でもやはり、稜線上は初めて体験するすごい豪風雨。武平峰の平坦な樹林帯にやむなく逃避しテント設営となる。私の共同装備は土色と青うぼうが相応しい重い

三万テント。しかも、持たされた時からフライシートはない。翌日、早々に下山するより他なかつた。みんな濡れ風だ。これが最初の、鈴鹿山中越こぎ地獄と兩地獄の巻だつた。

しかし、なぜか皮肉にも、この山行が、その後、年間の山岳部時代で、北アや冬の御岳山行などよりも、番強く印象に残つてゐるから不思議なものだ。退部してからも、部の一部のメンバーとは度々か山行を共にした。その中で、二年後の二月廿日に出發した柴曾一男さん、野村真砂子さんとの南ア・小渋川廻り（赤石岳山行（前夜発三泊四日））に、今も鮮烈な映像が記憶として残つてゐる。

山岳一帯の風雪には、まだ真冬の寒気が肌を刺し、主峰赤石岳山頂からの東の間の夕焼けには、言葉に尽くせない隔離された銀世界の、孤高の美しさがあった。静寂の中、冷氣深う白き眼前の峰々は雄大にそびえ立ち、殘照に赤く映えた荒川岳は、積雪期の険しく厳しい威容を誇つてゐるものだ。

このお二人とはその前月、嚴冬期の中ア・千骨敷カール、木曾駒ヶ岳に登つてゐた。

* * *

今年、正月早々にTVに報道された千骨敷カールの雪崩事故の記憶が頭の片隅にあつたことも手伝い、つい先日そこへ行つてきた。数年前の春スキー以来で、仰天するほどの観光客のいる夏山シーズンは初めてだつた。

私がその企画を立て、仕事関係の集まりで、大人九人、子供一人の一〇人の団体になつた。駒ヶ岳

ロープウェーを使い、念願の天体望遠鏡を抱ぎ上げ、駒ヶ岳と中岳の鞍部の頂上山荘に泊した。深夜、宿泊者が寝静まっている中、密やかに、私は主目的の湖入の星に大歓喜し満足した。翌朝、十数年ぶりの駒ヶ岳頂上からの日の出と三六〇度の大パノラマで、一時、下界の心が洗われる。そして快晴の真夏の宝剣岳、極楽平から千枚敷へ下り、帰路、駒ヶ根ソースカツ丼を腹に納め帰宅した。

* * *

二年前、『旅立ちの記』(本多勝一著作集第一回配本)という本で、この筆者が高校山岳部時代までを住んでいた伊那谷から登った南アルプス・塙見岳や中ア・南駒ヶ岳などの山行、そしてその後の大学山岳部時代の山行、その一九五〇年前後の詳細で綿密な「山」を綴った文章に巡り合った。それを読んだとき、一〇数年前の高校山岳部時代からそれなりに傾けた私自身のささやかな情熱や想いが、名古屋に来てから二〇代前半までに登った南アルプス、中央・北アルプスなどのその山行の幾つかの情景が半ば二重写しとなつた。そして当時の、私自身の「山」の体験、その「登山コース」の一つひとつが甦り、新たな発見さえも幾つかあり、近年にない戻舊の感動をその山の本によつて覚えた。

しかしま、情熱を傾けた時代は過ぎ、その社会生活の必要から「山」に求める私の現実も変わってきた。年月は、容赦なく中年の体型と体力作りに貢献し、山もそれなりの平凡な楽しみに変わり、スキーやハイキングなどへ年に一二度出掛ける程度

になつた。だからいま、岩登りや、テントをザックに抱ぎ何日も歩く縦走登山などは、殆ど過去の想いに出ただけになつてゐる。考えてみれば、一〇一二〇代に行つていた「登山」は、「山」を相手にした未知の体験や発見が幾つもあり大きな楽しみだった。が、半面、自分自身に向き合わざるを得ないかなりの苦行も伴つてゐた。その意味では、『オウム』ではないが多分に「修業」でもあつたのだろう。

一九九三年の秋、前述の本に巡り会う二ヵ月前、愛知県瀬戸市の「海上(かいしょ)の森」を歩いた。物見山(標高三三三メートル)からは、西に名古屋のビル群を始め瀬戸内海の街並みが遠望できる。二〇〇五年の万博立候補地として、TVなどが大きく取り扱うようになるまだ以前のことだつた。大都市近郊のこの平凡な山は、一昔の自然はどうなるのだろうか、都市生活に埋没しがちな日常から、自分自身の問題として考えてみようと思った。海上雲霧に住む鈴木さんは夫婦で植栽の真っ最中で、赤米黒米の稲穂を手に取り、この時初めて見せてもらつた。

じつは、以前から、ゴルフ場・スキー場の乱闘発、小型戦車のような軽油燃料のクロカン四駆車の急増、マウンテンバイクでの登山道への浸入など、山へ乱入りし、大自然の命を侵食していく人間たちの増加に、私は少なからず憤慨やる方ない気持でいた。今では何處にいたって、山のてっはでも都市型生活を営む現代人だ。文明の人工的な建造物や派手な道具立てや大仕掛けの中で、より多様な強い刺激を求めて遊ばないと余程満足できない。同様にそ

れを自然の中へ延長し山の中へも求める。「自然の息吹に雄渾に素朴に向き合うことなどなかなか出来なくなつてゐる。「山」のレジャーが一般大衆化したいま、そんな我ら現代人に、分かりやすくそのルールを提示しトップは確実にかけなければと思う。

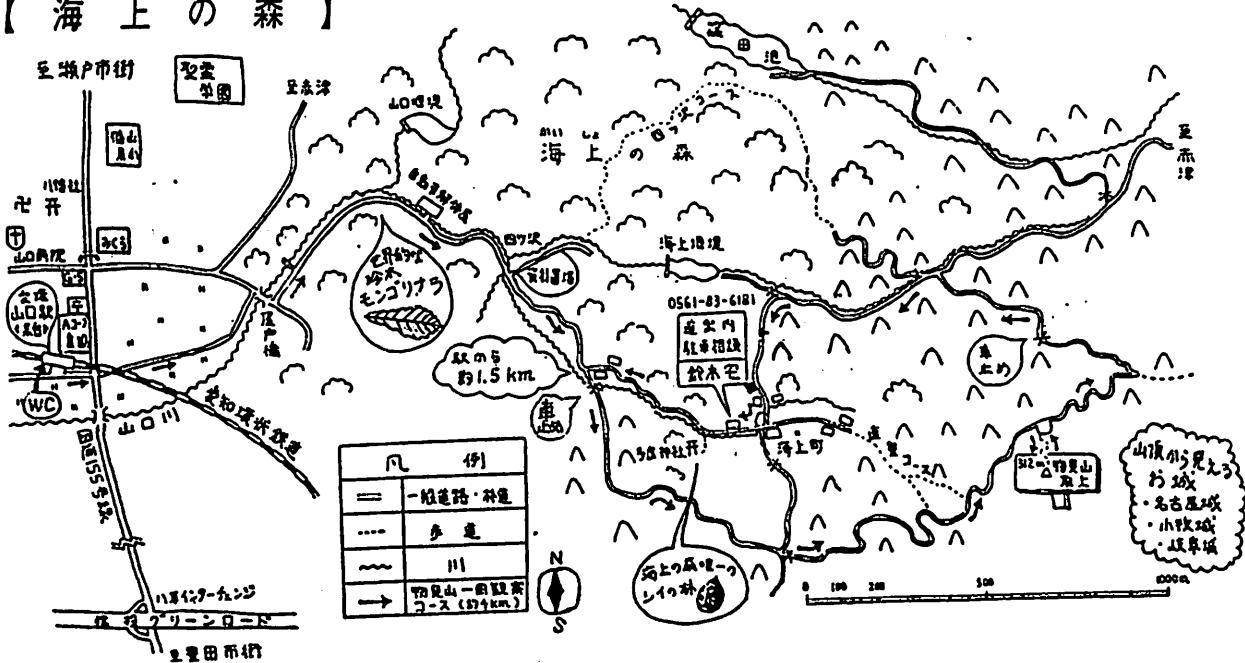
そういえば、II部山岳部時代、積雪期の木曾駒ヶ岳五合目で、何人がガウイスキーの人魔を抱ぎ上げ、山行のことを考えず同じテントの中で酒宴が延々続々、翌日、何人かの「自醉」が影響し、予想以上の積雪もあり順調に前進せず途中で下山しなければならなかつた。なんとも虚しい山行を思ひだした。そんな昔の時代の、他人を支配する山行に同行を余儀なくされることも、今思えば二年で部を辞めていった要因の一いつだつた氣もある。

* * *

かつてそうでなかつた山も、今はいつ何處へ行つても人がいっぱいいるらしい。昔、記録映画やTVの特別番組で見るくらいだつた岩と水の険しく厳しい山岳登頂ドキュメントや、四季折々の日本アルプスの高峰の映像も、いまは定時、TVニュース番組などでいつも簡単に、山小屋風景などと共に問近に飛び込んで来ることがよくある。そんなことも、登山人口が激激に増えた一因でもあるのだろうか。

しかし、大切にしたい山の空氣や自然の営みは、やはり、平凡な自然環境の中にも色々としてあるものだ。私は、いま、日常を過ごしている名古屋市の近郊の里山「海上の森」に、その「山」の原点と

【海上の森】



窪田 陽子

このごろの豪雨で、ひとつ思ったことがあります。小谷村、白馬村はひどい災害でしたが、一人も死亡した人がいなかったのはすごいと思いました。それは、豪雪、地すべり、てっぽう水といつも自然災害でいたみつけられている、いつもお酒飲んでニコニコしているおじいちゃん達が経験してきたことから、ピリッと自分たちで考え、行政より先に動けたことがとてもよかったです。人間はつらいこともあって、それを栄ようとして強くなっていくし、人間が生きていく時の力は経験による知恵なんだろうなと思いました。そんな知恵を身につけていきたいなと思いました。

皆さんが山から降りてきたり、きっといい顔しているでしょうね。

白馬村でも日に焼けた荷物をかついだ若者をみるとうらやましくなりますが、なにに年相応の山登りがあるさと、自分をはげましているんですよ。山を通じて、友達を通じて、いざというとき動ける知恵を身につけていきたいですね。がんばってください。

白馬三山一日駆け足縦走

山 崎 保

創部25周年おめでとうございます。卒業後も、正月は山の上と決めて十数年続けてきた冬山が、数年前から途絶えて、だんだん山から遠ざかっていただけに、自分にとっての山をこの機会に振り返らせていただこうと思います。

十周年の無名峰をまとめた山岳部当時、迷いながら求めた山岳部の山登りの方向のひとつが、4パーティーによる南アルプス夏山合宿でした。より多くの部員が参加して、それぞれが役割を果たして満足のいく山行をするとともに、部としての一体感を得るために、20人が4パーティーに分かれて縦走や沢登りを行い、三伏峠に集まるという形態でした。山を求める方向（山に求めるもの）が、ちがっても、みんながより多く参加できる山行をということで企画した夏山合宿だったと思います。岩や冬山へのチャレンジと山岳部のまとまりとの間で、いろいろと試行錯誤の活動をしていたのが懐かしく思い出されます。

4年の春に退部してからは、夏のスイスアルプスや、冬の赤石岳など、おもに単独行で続けてきました。卒業後も仕事に悩んで、剣の八ツ峰の岩に1人で取り付いたことも、正月の鹿島槍に新しい年の出発を期したこともありました。いつだったか、冬の槍沢でラッセルに疲れて引き返してきたこともあります。年に2、3回しか登らない山は、自分の心の節目みたいなところだったように思います。

さて、タイトルの「白馬三山1日駆け足縦走」ですが、これは、昨年の10月に、猿倉から大雪渓を登って、白馬岳・杓子岳・鎌岳をまわり、再び猿倉まで1日で駆け抜けてきた山行です。10月8日に車で北陸経由で白馬の麓まで入り、あの中日と巨人の10・8決戦をラジオで聴いていた翌日です。仕事の疲れや中日の負けた悔しさ？を山の温泉でときほぐそうと、白馬三山をまわって鎌温泉小屋に泊まって温泉につかる計画で出発したのです。

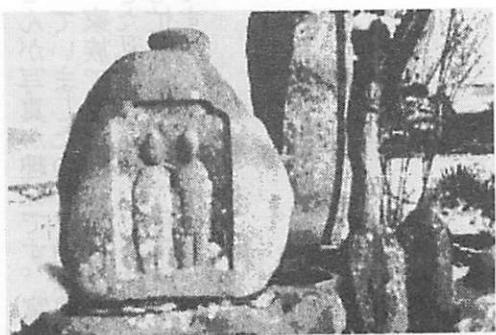
とてもいい天気で、山行には恵まれました。紅葉を見ながらの大雪渓の登りは快適で、見上げる杓子岳が雄々しく、いつもここを通るときは下りばかりだったので、新鮮なビギナー気分で登って行きました。さほど疲れもなく、まだまだ歩けるなと思いつつ、白馬の頂上から杓子へと午後の登山道を1人歩き続けました。鎌岳の下りから足が疲れてきているのを感じてきましたが、もう少しで温泉だと自分に言い聞かせて歩き続けました。思ったよりも、かなり下ったでしょうか、やっと鎌温泉が見えてきました。しかし、なんと白馬鎌温泉小屋はシーズンオフすでにたたまれており、テントもヘッドラン用意していなかった私は、ピンチ

にたたされたのです。温泉につかってのんびり過ごしている登山者をしり目に、暗くなるまでに何とか猿倉までたどり着かねばと、駆け足の下山になったのです。やっぱり山に入るときは最善の装備をと思っても後の祭り、結局、暗闇に目を凝らしながら猿倉に何とか到着しましたが、温泉につかりそびれてしまったのです。

それでも温泉をと、翌日、目をつけたのが雨飾温泉です。車を走らせて、露天風呂に入りに行きました。雨飾荘の露天風呂につかって紅葉の山を見ているうちに、またまた登りたくなって、サブザックをかついでいました。雨飾岳は、一休みした沢から見上げる紅葉が岩場に映えてとても美しく感じました。そこからが急登だったのですが、山に魅せられて登り続けました。残念ながら、頂上に着いたときはガスって小雨も降ってきて展望が開けませんでしたが、また訪れてみたい山になりました。この2日間で白馬三山・雨飾岳をまわって、久しぶりに山に登った満足感がありました。

ところで山とは不思議なものです。教師の仕事について15年目になりますが、今までにテントを持って2、3人の生徒を連れて山に登ったことが、3回あります。その3回とも、山から帰って彼らの生活が一変してしまうのです。歩きながら、そしてキャンプしながら時を過ごす中で、心を開いて語り合えるからか横着な生徒が素直になってしまいます。山という自然の力を生かしたスクールカウンセリングをすすめて、その道に進もうかとも考えています。

ほそぼそと山登りを続けている現在ですが、単独行から、もう少し何かしら繋がりというか、共に楽しめ、山を通してふれあえるような山を増やしていくのかなと思っています。それが、ファミリー登山的なものになるか、野外学校的なものやカウンセリング的なものになるかはわかりませんが、自分の気持ちの中に、山の存在をしっかりとおきたいと願っています。



ファミリー登山

(那須岳一九一七m)

風間 淑子（旧姓三橋）81年度卒

二部山岳部創立25周年おめでとうございます。私は、76年～81年ごろ在籍していいた部員です。チャップとよばれています。峰10周年をつくったのをおぼえています。また、冬合宿のあり方に、男子部員と女子部員で議論もしましたね。思い出はいっぱい。そしてそのころが懐かしいと同時に私の青春時代の宝物……。

卒業してからも、友人、主人、こどもたちとゆっくりと登っています。

友人とは南アルプス（北岳・塩見岳）。そして結婚してから、主人と尾瀬・燧岳・日光・白根山・秋の涸沢に登りました。長男・勇児一才の時に、天神平から谷川岳に登りました。（その折、下山途中の猪又先輩に遇いましたね）勇児四才、次男・康児二才。平成5年10月中旬那須岳に登りました。ベンジョンをのんびりと9時ごろ出発し、那須岳ロープウェイの駐車場に車を置く予定でしたが、満車状態。次の駐車場へ車を置いて、ちょうど那須岳登山道の脇だったので2時間30分の登山道を歩くことにしました。康児は主人の背中に背負子、勇児は私とのんびりと歩いたね。勇児は虫が好きなので最初は虫を探しながら平坦な道を歩き、それでも2時間は歩いて峰の茶屋に着きました。そこからは紅葉した朝日岳がよくみました。イオウの匂いのする登山道をゆっくりと歩いていく。頂上はみえるけど、だんだん道も急になつていて。

「もう、ぼく歩けないよ」と勇児。みると本当に四ツ足になつて歩く。仕方なく康児と交替、15分ぐらいい勇児も背負子に。すれちがう登山者から「坊や、もう少しで頂上だ背負よ。」の言葉。本人（勇児）は頭がボーッとしあじめる。頂上分岐。残念ながら母だけで頂上踏む。下りは、じやりと砂だらけの道を下る。気を付けないと危ない。ロープウェイ駅が見えるところからガスがかかってきました。2時頂上駅着。帰りの車中で勇児のよく眠ることほんとうに勇児はよく登ったなあ。

平成6年4月中旬、勇児四才・康児二才、筑波山登る。康児も歩いて登る。新緑に囲まれた登山道をコースタイムの2倍かけて、3時間かけて登り切る。そして、いま勇児五才・康児三才。今年は太清水から尾瀬沼へいけたらいいなあと思っています。また、近くの山・日和田山に年2～3回登っています。低い山ですが、岩もあり、子どもたちもそれを登るのが大好きです。主人は登山歴はありませんが写真が趣味です。富士山や尾瀬の写真を自身時代撮っていましたので、山は興味があります。わが家の目標は、家族で富士山に登ること。だんだん体力が衰えてきた私、ダイエットと体力向上が今の私の課題です。仕事も忙しいですが、毎年家族で山に登ることが生きがいの私です。

山との出会い

高橋 憲常（81年卒）

正直いって自分がここまで山にのめり込むとは思っていなかった。振り返れば、山岳部に入部して山を始めて早、18年。途中ブランクがあったものの登り続けて来た。今では生活の一部に組み込まれてしまったほどだ。

山岳部に入りたての頃は決して優等生ではなかった。日曜もバイトをやっていたこともあり、気が向いたら山へ行く程度でトレーニングも積極的ではなかった。当然、初めての夏合宿（北ア・穂高～太郎平の縦走）ではバテバテのていたらくだった。しかし、その年の11月に冬山の偵察で南ア・聖岳に参加して俄かに目覚めてしまった。そう、自分にとっての“山との出会い”だったのだ。畠薙ダムからの長い林道歩き、そして雨から雪に変わった登山道。はい松をピッケルの変わりに深いラッセル、たどり着いた頂上で見た赤石岳。すべてが新鮮な体験だった。

それ以後、山は生活の一部になり体の一部になった。山の計画を考えるときいつも胸躍らせていた。良き先輩、仲間に巡りあえて4年間を楽しく過ごせた。今でもこうして連絡を取り合ったり、酒が飲めるのは山のおかげだと思っている。忘れもしない、1979年の暮れから正月にかけての冬合宿。ルートは北ア・燕～大天井～槍の縦走。強風の中の猛烈なラッセル、そしてアイゼンが刺さらないほどの蒼氷…。今だにあのときのレベルを越える山行はできていない。

卒部後は3つの山岳会を渡り歩いた。冬の登攀、沢登り、アイスクライミングと一通りのことを経験してきた。しかし、どんなに厳しい山行をしようが自分にとっての山の原点はあのときの“聖岳”であり、かけがえのない山岳部の仲間たちだと思っている。

※追伸 先日の藤内での岩登り、楽しかった！現役の皆さん、ありがとう。

■白山のお花畠へ行きました。

■1995年7月29～30日と、遊び友達4人と白山へ行ってきました。

■29日は、仕事を終え、夕方に飛騨高山を出発して、白川村の平瀬経由で白水湖登山口に午後7時30分到着。さっそく、焼き肉とビールで前祝い。車の中で仮眠。

■30日は、午前4時00分起床。みそスープに梅おかゆで腹ごしらえして、出発5時。大倉山の非難小屋は、立派なもので、ここまで2時間30分のますますのペース。途中、下山してくる人たちに会う。「これから登られるんだか。遅いね。白山は、夜中に登って、ご来光をながめるところなんですよ」。（よけいなお世話と思ひながら）「それで、ご来光はどうでしたか？」「今日は、ガスってあいにくみるとことができませんでした……」（ザマーミロ）。ここから先は、大倉尾根づたいにあるき、展望も良好で、雪渓あり、お花畠あり（ハクサンフウロ・ニッコウキスゲ・コバイケイソウ・黒ユリ・小岩カガミ・アオノツガザクラ・ハクサンコザクラ・チングルマ・コケモモなどなど）、白山の峰嶺も眺めることができ、疲れもふっとびます。室堂までさらに2時間30分。さらに白山最高峰、2,702mまで、30分。

■室堂では、夏山シーズンで、人、人、人・・・で一杯。天気は快晴、下界では35度以上の酷暑が続くなか、18度の快適気温。フライパンを持参して、さっそくホルモンとB E E Rと白玉うどんで昼食。

下山は、3時間30分。往復14kmは、年に比例した体力では少々長い日程だけど、久々の山行で心地よい汗をかくことができた。白水湖では、露天風呂に入って、登山の疲れをいやすことができた。

■月の一回のペースで仲間と近くの山に登っている。時々は、愛犬サリーにもお供してもらうこともある。現在のストレス社会においては、登山（ハイキング）のはたす役割は、とても大きいものと考える。

1995.8.1 Y. KAWADA(1983年卒業)

「我が家の山行記録く」

ゼンコウ&ヤマコ

大学を卒業して10年がすぎた。「八ヶ岳」の歌を口ずさみながら一緒に登った嫁さんと一緒にになって8年、子供も3人生まれた。

♪あの山にも似て、ボクは父親♪という想いもあり、八ヶ岳に行こうと思ったが、何故か日本の最高峰、富士山に去年登った。

苦節9年、やっと山らしい山に登れる！と、6才、4才の子とトレーニングを開始。1才の子を背負子に背負い夜のドバリを走りこみ、ついにその日がやってきました。（ある時は突然の夕立で帰れなくなり嫁さんに迎えにきてもらったりもした。）

2日間は本栖湖キャンプ場でオートキャンプを楽しみ、3日目の朝テントを置いて新5合目まで愛車でレッツゴー、さーいよいよ登山だ！！

8時すぎから、嫁さんは赤いザックに子供のレインウェアとレーション、ポリタンクや地図をつめこみ、ボクはチビすけを背負子にかつぎ、二人の子を両手に5人の山行は始まった。

天気は快晴、気温はよくわからんが爽快だった。とにかく行ける所まで行こうと嬉々として挑んでいった。さ一次は6合目だ。

ところが…。富士山を登られた方はご存じかも知れませんが富士山は雪渓を真直ぐ登るようなもの。しかもしかも、小屋はすぐ上に見えるくせにいつまで経ってもつかないので。しかもしかもしかも、5合目の次は新5合目、その次は6号目、新6合目……、これはサギ以外の何者でもないぞ！！

新7合目まで登った子供たちにボクは拍手をおくりたい。よくヤッタ。オレたちの頂上はここなんだぞ！！と…。

それ以降、子供たちは山に登りたいとは言わなくなりました。それまでは鈴鹿のセブンマウンテンくらいは登っていたのですが。

山岳部のウワサは、病院にくる二部の実習生からよく聞いています。オープンハイクは今日も続いているそうですね。また、精神障害者の作業所に後輩が職員として入り、ボクたちの仲間になったとか…。

ボクの希望はひとつ、ファミリー登山をやる人はいませんか。機会があればご一緒しましょう！

あれからもう何年になるのだろうか。

山岳部にありながら私はあんまり山には行かなかった方だと思う。でも山岳部員だった事はとってもよかったと思っている。

私が大学に入った年はちょうど大学が名古屋の「いりなか」から知多半島の「美浜」へ移転した年だった。つまり美浜一期生になるわけである。名古屋から一時間、仕事をしながらの大学生活ではなかなか時間もつくれないだろうなぜか、私が入学した年の同じ学年の山岳部員は最高時で10名もいた。 ireかわり立ちかわり入ったりやめたりというケースもあった。「山に行く」とひとことで言ってもいろんな山やロッククライミングからアウトドアのキャンプの様なものまで趣向の巾といえば、ピンからきりまであるといえる。I部山岳部と違いI部はアウトドア同好会なるものもあったりしたけれどII部ではすべてがII部山岳部に集っていた。私の学年はだからわりと趣向の巾もひろく部会でも何かといえば先輩を困らせてしまう事が多かった。いろんな思いや趣向を求めた時期であり状況であり世代であったのだろう。そんな中でも特に私などはなんじゅく路線と言われる最たるものとの様であった。

しかしふりかえってみればもっと自分の趣向とする事をやればよかったです。外で何かをやる。自然に触れて何かを感じ何かを得て受けとめて自らの生き方に生かして行くと言ってしまえばかっこいいけれどもそのような事をもっと基準にして、自分の求める何かをもつといっしょけんめいやればよかったのだろう。しかし私の場合は多くは部会でみんなをこまらせていた、ただそれだけの存在でしかなかったのではないかと思われる。

1年の時、当時4年生だった先輩にさそわれて南アルプスを南側から縦走する夏合宿に参加した。けれども、この合宿が今ふりかえって考えてみると私にとって一番印象的で心に残っている山行であった。また、2年の時、白馬岳から朝日岳に向かって縦走した夏合宿があったがこれもまた印象深い忘れがたいいい山行であった。その他にも先輩に連れて

行ってもらった山行や自ら企画した山行もあるけれども、その中で先輩が伝えようとしたものは数しえず多くあったのではないかと思われる。

1年の時の合宿など先輩といっしょに行ったりいろいろな山行に参加して感じた事から考えてみれば、先輩がいっしょうけんめい求めようとしたもの後輩に伝えようとしたものたとえば山へのより困難な所でも越えて行こうとする挑戦や、それに対するチームワークや思いやり、アルプスにアタックして行こうとする思いやロマンそれに対する準備や気構え、とでも表現できる様なもの、それら先輩方が築きあげてきた事、伝統など大切なものをとかく私などもよくわからせずにこばんでしまっていたのかもしれない。

それらは実はとっても大切な事でありもっと柔軟になって山に純粹に登ってふれてみることが必要であったし、もっと素直に見つめなおして受けとめてみなければならなかった、いけなかつた事柄なのではなかつただろうか。そうして私の山に向かって思う気持ちや育てはぐくんで行くべきであったと今ふりかえって思うのである。

まず山にふれてみなければわからないという事はいくらでもあるものなんだ、という事なのだろう。

今思い返して当時を思えばいくらでももっともっとと言ってしまいそうである。

II部山岳部に入ってしかし最も良かったと今でも思っていることは、多くの先輩方や、同期の者、そして後輩の多くの方々と知り合う事ができた事であろう。そしていろんな思いを心をわって話をし、語りめぐり合えた事だろうと思っている。それはこれからもまた続くであろう。

そして山に登った事、いっしょに登って同じ空気を胸いっぱいいすって山頂で見た数多くの景色は今でもこれからもきっと忘れないだろう。

それが一番良かった事だと私は思う。

富 永 進

7年目の徒然帳

日本福祉大学二部山岳部を5年かけて卒業して早7年。なぜか毎年のように知多半島へ家族で温泉旅行しています。

よほど大学時代が忘れられないんでしょうね。

《あの頃》

毎日毎日考えていることはと言えば二部山岳部のことばかり。何であんなに一生懸命になっていたのかなあ。

いやいや、やっぱり二部山岳部のことが大好きだったからだろうなあ。

山よりも二部山岳部のほうが好きだったような気がする。かんじんの山はあとからついてきたような気もする。

山の右も左もよくわからなかつたあの頃、槍といわれても何のことかよくわからなかつたけど、そんなことよりも何よりも二部山岳部の山好きの先輩たちが魅力的だった。

そんな先輩たちのいるB.O.Xに行くのが楽しくてしょうがなかった。そんな先輩たちのようになりたいと思っていた。

はじめの頃、毎週のように山へ行くのが苦痛だった。しかし先輩から山にも行かないのか、と言われるのがいやだった。だから少々自分に無理をして山に行っていた。

ところが毎週山へ行くようになると今度はそれが当たり前のようになってしまった。そんなふうにして山の経験が自分にとって自信となっていったと思う。

そうなると今度は山へ行くのがだんだんと楽しくなってきてしまった。

何となく『山』に憧れて二部山岳部に入ったたら人の魅力に引きつけられた。

魅力的な仲間と山へ行くうちにやっぱり『山』は、いいなあと実感した。

二部山岳部を卒業して7年。

足は山から遠ざかっているけれど、『山』への思いと『二部山岳部』への思いは今も変わっていないように思う。

子供がもう少し大きくなつたら夏休みには家族で徳沢あたりにテント張って子供に、昔お父ちゃんとママはなあ、ここが好きでこんなふうにしてテント張って泊まつたんだぞ。なんて話してやろうかと親ばかなことを考えている今日この頃であります。

現役の二部山岳部員が、がんばってやっていること知りとても嬉しく思います。これからも、いちO.Bとして応援していますので『山』を楽しんでください。

ところで夏合宿のはがきは、まだ届いていないぞ。今頃山に入ってるやろに。

岡田 忠

山岳部25周年記念誌発行 おめでとう ございます

前略 山岳部の皆様 ますますご活躍のことと思います。

私は大阪に来て13年、大学を卒業して早10数年になります。学生時代の、特に山に行っていた頃のことが昨日のことのように次々と思い出すのですが、ずいぶんとたったものです。

大阪では『山と友の会』という山登りの会に入っています。子どもが小さい頃は、障害者登山に、家族で参加、夜又神峠や、中央アルプス駒ヶ岳へ行きました。視力障害の方といしょに登ったときは高さによる空気のちがいとかを感じながらのゆっくり登山を楽しみました。しかし、このごろは、会報をみているばかりでなかなか山には行けません。

二男の亮（小四年）が、今年の1月より長野県の小谷村に山村留学でいっています。白馬が望める雪ふかいところです。四季がとてもはっきりしていて雄大な自然がつつんでくれるようないいところです。子どもは留学センターで生活しながら村の学校へ通っています。それで毎月のように長野へはでかけます。子どもは近くの山に登ったり 基地つくり 魚釣り アルペンスキー ノルディックスキー 等々のびのびと自然のなかでの遊びを楽しんでいます。いまは山の奥の池で、サンショウウオの卵をとってきてそだてるに夢中のようです。私はあまり時間がないのですが たまに行く小谷村で地元の人の案内でたけのこ狩り 山菜とり 塩の道祭り 秋祭り スキー 温泉 等々楽しんでいます。6月には水芭蕉の花が見たくて梅池へ上がってきました。ゆっくり登山をすることがなかなかできないのですが子どもと楽しんでいます。学生時代のような山行きはとてもできませんが、いましばらく子どもと家族で山や小谷村の自然を楽しもうと思っています。子どもと一緒に・・・・という楽しみもこの先何年でしょう？ そろそろ私なりの楽しみかたもみつけようと思っています。近況報告になってしましましたが、山岳部の皆さんのご活躍に期待していますまた、クラブのこともお知らせください。OBとしてできることがあれば微力ですが協力したいと思っています。記念誌ができるのを楽しみにまっています



大阪府茨木市上穂積3-3-28

山本 美智枝（旧姓 田辺・なべちゃん）

1995.8.31

25周年記念を祝って 徒然なるままで

早いもので、卒業してから4年が経とうとしています。
入部したのが、18歳の時（1987年）、生意気盛りだった私を先輩方は、快くご指導して下さった。

そのお陰で、5年間（1年休部）続けられることが出来ました。良い先輩、後輩に囲まれて、幸せだったと思います。

バブルが弾ける前に、運よく神奈川県の福祉職として採用され、現在、秦野市にある湘南老人ホームというところで勤務し、老人の介護に日夜励んでおります。今後、知的障害者児施設、身体障害者施設等への転勤があり、福祉全般を学ぶことが出来て、大変よかったです。

私生活のほうでは、平成5年に北アルプス雲の平でのアルバイトで知り合っていた人と結婚し、現在は、一児の父親です。また 来年2月には、二人目が生まれる予定です。

登山活動のほうも、「母子家庭だ！」と妻に言われながらも、小さな山岳会で、一か月に一度位ずつ山行しています。今年は、穂高の縦走をしてきました。

他には、昨年からカナディアンカヌーを始め、暇があると、近くの川や湖に行って、漕いでいます。

近況報告ばかりになりましたが、Ⅱ部山岳部も25周年を迎え、更なる発展を祈っています。

平成4年卒 ぶち2 大渕克己

連絡先 ④254

神奈川県平塚市袖ヶ浜20-39 227号

☎0463-22-9426

3. こいこい

か い た か こ

亀井 孝子と申します。

実家はアイチタンなのですべり今は埼玉県の大宮市
にある精神障害者、社会復帰施設...

『やどかりの里』で働いています。

埼玉のみ住みやう.. 行くすべり海へみんなが楽し。

私は1990年に大学に入学し、91年に山岳部に
入部しました。当時は22才でした。モトモと運動部オーナー
だったおじさんは迷惑かけたようだ。二年生。でも

2007年下期 大学生三名を送りました。

山岳部は、もうみんな食文化部や音楽部など)。

どなたに時間ばらまくてもみんな同じ笑顔で
会えると信じてます。

これからもどうぞよろしく

働き始めて1年半...あと(?)間です。

最初の1年は立派には(今もまだ...)で、忙しく

途裕べなくて山へも行けませんが、二年目

は「まだ山へ山に登る」などと思ってます。

職場には「山へ山へ山へ」とか「山へ山へ山へ」。

1995年卒 進藤禎之

みなさん元気で頑張っているでしょうか。お元気ですか？頑張っているでしょうか。

そろそろ夏合宿の時期になってきましたが、無理して山に登ってください。もし雨が降ったりしたら寒いけど、たいへんけど、昨年同様雨が降ることはまずないだろうから、熱い夏を体感してください。

さて、私は、仕事を頑張っていますが、盆休み以外は、ずっと仕事です。とても山に登るひまもないし、装備（テントなど）もありません。山岳部から借りるのもいやらしいし、お金で買うとしたら、けっこう金を使いそうでたまらない。どこか山岳会に入会してみたいけど、休みがあまりないから、きっとユウレイ会員になりそうだ。山岳会に入会しているOB、OGの方々に、山岳会の活動状況など、教えてもらいたいものです。

私の仕事は雨が降ったら休みになるので山に登るわけにもいかず、梅雨どきは、ひまでひまでまいりました。最近バッシングを覚えたので、雨があがるとバッシングに行く日々が続きます。みなさんも山になんか登らないでバッシングをしよう。あまりおもしろくないけど。

『無題』

北海道に一人遠く離れていると美浜のありふれた風景がとてもなつかしく思われます。大学在学中は冬の北海道がとても恋しかったのに、です。月並みな感想ですが、人は、住みなれた土地をはなれてからその土地を見なおすものだと今思っています。はなれてしまえば全てが良い思い出に変わっていく。つらい時の事や、悲しい時の事も、大切な物になっていく。また、そうしようと心が働く。そうでなければ人は何で前向きに歩んでいけるのか。

山に登るということは、非日常的な行動で、自分はその中に自分自身を見い出そうともしていました。ハシカみたいなもので若い時には通る道だと思います。僕もその一人でした。うまく言い表せないけれど僕自身は、見失いつつ、見い出しのくりかえし。非日常的の行動については一人一人思うところがあるはずだし、今現在、その非日常について思いめぐらしている人もあるだろうが、僕の思うところを一つ。非日常は入り口ではあるけれど答えではない、というところか。不熟ながらそう思います。考えは同じになる必要はないのだから一人一人見い出してほしい。

ものがわかっている人が見れば当たり前の事しか書いてないので少し恥ずかしいのですが、そんなことを思わせるのが山岳部での思い出です。卒業して数ヶ月しか過ぎていませんが山はながめてばかりです。北海道の広くなだらかな山々を見ては、北岳の頂きに心ははせ、雲の流れにアルプスの冷たい岩肌を感じます。昼休みに草地で横になるとそんなことが頭に浮かび一時の充実感を得て、今、北海道に居ることに静かな満足を感じる。そして、何もかも忘れてしまうぐらい身体を動かす。力が抜けることもあるけれど、日常にしては、けっこいい内容だ。二ヶ月ぶりのパリダカも言うことを聞いてくれるし、普通だけれど楽しい毎日かな。まとまりのないまま終わっていくのも徒然帳のようでもたいいのかもしれないな。

タニマサヒロ

山に物想ふ



私が二部山岳部に入部したのは三年の春。それまで山岳部があることすら正直知らなかった。たまたまバイト先で一緒だった亀井さん、深津氏と出会って、少しずつ山岳部に興味を持って、新歓期のクラブ、サークル紹介などに行って、入部を決めてしまった。昔から割と運動とか体育の分野は苦手で避けていた所があったから、自分でも意外だった。オープン山行で初めて鈴鹿へ行って、藤原岳に登った。あいにくピークはガスがたちこめて天気が下り坂だったため踏めずに終わったけれど、ハイな気分だった為か楽に登れた。これで気を良くして次に登った靈仙は山靴をはいて、ヘビーに疲れて、さまざまと（山岳部ペースについていけず）実力の違いを知らされた。何度か山行を重ねて、初めてアルプスに登った時の事は忘れない。6月下旬の白馬岳、個人山行だったけれど、メンバーはいつもの山仲間。ピークハントだったけれど、私にとっては初の泊り山行に、初めての大型ザックをかついで山行、この時もあいにくの雨、雪がまだ残るテント場、翌日も天気はグズついて小雨の中雪渓を登った。登るに従って天気は回復して、山荘の辺りでは、すっかり晴天、日焼け止めを塗ったくらい。ピークは風があって、下に広がる雲を見て、その移り変わる景色に、その大きさに感動した。登る度いつも「何故こんな辛い思いをして山に登らなくちゃいけないんだ」と思うけれど、ピークを踏んだ瞬間、その辛さは逆に喜びに変わる。山行ごとにいろんな想い出がある。私は一人で登ったことはないけれど、今後もずっと、山へは仲間と登りたい。山は下界と違って、そこには文明の力はない。自分と自然が対峙する所。何もないから逆に何にもしばられない。時間も、場所も、人とのつきあいも、日々の生活と違って誰もが一線上にあって、とても素朴で素直で、こだわりも見栄もなくつき合える。

卒業して山から遠のいてしまったけれど、また皆と共にピークを踏みたい。コッヘルを囲んで手に手に武器を持って、ランタンの灯の下で、狭くるしい8テントの中で、焼肉食べたり、雑炊食べたり、ボーッとお茶すすったりしたいのだ。一度泊り山行をすれば初対面の人とでもすぐ打ち解けることができるは、やっぱり苦楽を寝起きを共にするからなのだろうか・・・。山での食事は貧しくても美味なのは、それしかないからなのか・・・。山に登る最中考え事ばかりするのは苦しいからか・・・。何もないから自分と向き合えるのか・・・。山に登る度私はどめどなく物思い、物想ふのであった。

'95. 7. 22

二部山岳部で思ったこと

大学を卒業してまだ“半年”。二部山岳部に対するは、まだ“自分自身が現役部員の立場を気にする。今日に限って、今いはんはボックスに行き、「今度の日曜日の山行だよ」と言つてしまひう。まだまだ二部山岳部にいたね、いたよ～。でも誰もが期限つきだものね、だからこそ、その月日が大切なものに感じられるのかな…。

山登りって、最初は、頂上で良い眺めと達成感を感じるところが樂いかなのかなと思ってた。でもそれでだけではいなかった。体から汗をふきながら、「水が一番おいしいねー」とよんて言つながら水をまくほり飲んだり、自分の必要な荷物は自分で背負つたり雨をカッパに受けつつ、「雨の日は寒くてイヤだね」と思つたり…何でも体で感じることでできる…。山登りは、時に命にもかかわることでから、いまみしが、きかず何でも言ひあえる人間関係が必要になつてくる。(難しいけど…)そして、自分で自分で支える体力…人として、あたり前のことをあらためて感じさせてくれる、「バテずに歩き通せろよ」、「滑り落ちたら死んじゃう」そんな不安…。これが全てのことをみんなで共有できるそれが、良かつてよーと思う。楽しい二部山岳部のメンバーとね。

私は、今年の春から知的障害者施設で働いていますが仕事でも、やつぱり頂上と同じような目標とか理想を決め、それに向ひつつ、周りの人たちと一緒に行動するなど、この人たちといつぱり良いか…と今の過程を大切に感じられるようにしています。

…最後に二部山岳部のお三方、ボックスにいつまでも人が絶えませんよ!!

夜の

‘95.3卒業 水井和江

「このごろ想うこと」

鈴木 恵

卒業して半年。

II部山岳部は、私にいろいろなことを教えてくれた。

山に登るという1つの目標のもとに、お互いが集い、話し合い、準備し、行動する。このことが、人と人との支え合って生きてゆくということと、自分を知るということだったということに、今、ようやく気づきつつある。そのように思うと、もっと、大学時代に登つておけば、と思う。

しかし、もう大学時代には戻れない。ならば、せいぜい、現役部員に負けないよう今を生きるだけだ。

部員同志の絆を深めつつ、個人を認めるところがII部山岳部のいいところだと想う。現役のみなさんの活動には、励まされます。いつかどこかの稜線でお会いしたいですなあ。

山を思ふYAMA,

193S2447 山本武弘

2年の時に以前から興味のあった山岳部に入部した。

もし、友人である黒田君がいなかつたら、僕自身そうすることはなかったと思う。

若い頃に山に行っていたという母親の影響もあり、高校時代も入部を考えたが、あまりの厳しさに断念した。

今思うと、このサークルに入ったことは非常によかった事だと思う。学生時代にしか味わうことのできない山へのチャレンジを自分なりにしていきたい。

このII部山岳部も25年以上が過った。私の生まれる以前より成り立つこのサークルも盛衰の時期をくり返してきたことと思う。新しい世代の我々もこのサークルの火を消さないように努力していきたい。

1995年12月吉日

—山岳部の活動を通して—

「大学生活は山で終わった。」
ちょっと誇らしげに思う。

遅ればせながら大学生となった私は、大学4年間は自分のやりたい事、今しか出来ない事を思い残すことなくやろうと決めた。

そして山岳部に入った。

ゼミも大切にしてきたが、何よりも山行を優先させてきた。

その介あって、山行の写真はアルバム3冊になる。アルプスから出した絵ハガキも数知れず。たくさんの想い出が出来た。

92年夏。初めて登ったアルプス。3000mを登りながら、健康な体に生んでくれた両親に感謝した。そして、この美しいアルプスの自然を私の子ども達にも残してあげたいと思った。

93年夏。薬師岳の遭難碑。親の気持ちを想って涙した。

そして今年の夏。最後の夏。山に対する自分の弱さ、甘さを痛感した。

山行を通して、自分という者がよく解った。

山では常に危険が隣り合う。

衣食住を供にするだけでなく、危険が伴う活動であるが由に、メンバー間の信頼関係がなければパーティーは組めない。だからこそこの4年間山を供にしてきたメンバーとのつながり、彼ら1人1人が、私にとっては最高の宝である。

この先何十年たっても、彼らのことはとても大切に思っているし、又大切にしていきたい
今後も山は続けていくであろう。

しかし、この次登る時は一緒でないかもしれない。けれども、たとえ一緒に登っていないくとも、「あの時、こんな事があったなあ」と、ふと彼らを思う時があるだろう。

そんな、とても大切に思える時がもてたこと、大切に思える人と出逢えたこと、つながりがもてたこと。全てがこれから私の私を豊かにしてくれることだろう。

この4年間の山岳部の活動を通して、私がつくってきたものだ。

92S0518・4年

大西君枝

『私の山に対する思い』

深津孝宏

1992年4月、この日本福祉大学に入学し、何を思ったのかⅡ部山岳部に入部した、迷いもせず。入部のきっかけは当時4年生だった○本先輩の「山でみる星はキレイだよ」この一言だった。

それから3ヶ月、ガムシャラに山に登った。鈴鹿7マウンテンもこの3ヶ月で登りきった。自分でも信じられない体力&精神力だったと思う今日この頃である。

その後、夏合宿で登った南アルプスの北岳、そこは最高だった。さすが日本No. 2の標高をほこるだけはある。そこから見た富士山はきっと忘れないであろう。

その後の山に登り続けたが、その年の冬、腰痛とヒザの故障により、秋から冬にかけては断念せざるをえなかった。

この故障は大きかった。その後、2年で8回、3年で4回と私の登山回数を減らす原因となった。

2年次はそれでも頑張って山に登ったと思う。しかし、「歩けなくなるほどの腰痛」になるであろうという恐怖には勝てなかった。歩けなくなるどころか椅子にも座っていられない、という痛みは恐らく忘れられないであろう。これが、私を山から遠ざけた最も大きい原因である。

それに伴い山に対する思いが薄れること、他の部員との山に対する思いの違いなど、あげればきりはない。

しかし、「百聞は一見にしかず」といった言葉のとおり、数少ない山での景色はきっとよい思い出になるであろう。特に2年生の時、準合宿でいった鳳凰三山での星空は行ってみなければ分からない、言葉にできない絶景であった。

私も4年になり、就職も地元群馬県にある老人保健施設に決定し、再び群馬県に帰ることになった。これからは、お年寄りと一緒に山のふもとで生活する日々が始まる。

恐らく、これから山に登ることはまずないであろう。山岳会に所属することもないだろうし、個人的に登ることもないであろう。

ただ、この日本福祉大学Ⅱ部山岳部での思い出は一生の思い出になるであろう。

2部山岳部に入つて思う事

3年 93S2058 堀川尚美

私が山岳部に入部したのは、2年生の後期に入つて10月ぐらいだ。今でもドキドキしながら、BOX3の扉を開けた時の事を思い出す。それが、今では平気でBOXに入りできるようになり、大学生活の中でサークルが占める時間も長くなつたように思う。そして、同じ山が好きな人達と一緒に集まつて、ワイワイしゃべったり、遊びに行つたり山に行ける楽しさを感じ、自分の居場所を見つけられたようで、とてもうれしい…。

これまで冬合宿と夏合宿を一回ずつ経験したが、やはりいろんな意味で、いい思い出になつている。

しかし、ただ楽しいだけの山岳部であったような2年の頃に較べ、3年になると、いきなり部の運営など中心になつていかなければならない立場の学年になり、とても荷が重く、どうしたらいいのか分からぬことが多い。それは今でもそうで、基礎的なことも知らないままやつてはいる。部長の田口くんには、頼つてばかりでというより、任せにしてしまつている。

それでも、一年生は部室に足を運び、一緒に山に行つたり、各人で努力されてる姿をみると、こちらもがんばらなくてはと思うし、励みにもなる。そしてなによりも仲間が増えたことがうれしい！

そして4年生の先輩方が、暖かく見守つてくれ、忙しい時期だと思うのに、よく部室に顔をだしてくれるので、こちらも心強い。

でもみんなで、一つのことに向かっていくにしても、まとまらなかつたり、提出物もそろわなかつたり、部員が集まらなかつたりとバラバラで、すき間風の吹くような感じで、むなしく思うこともある。

しかし、良くも悪くも私たち自身が作り上げることなのであって、過去の先輩方の真似はできないし、先輩方の築き上げてきた山岳部のしっかりとした組織運営など、はずかしいけど今は、先輩方の時のように、機能されていないと思う。甘んじてはいけないけど、できるだけの事をやっていき、少しでも後輩へ、反面教師の部分が多いと思うが、精一杯やれいこうとする姿勢は伝えられるように努力して、部員全員で作り上げていきたいと思う。

仲間と一緒に山に登ることが好きで、山岳部を選んだが、今こうして大学生活の中で、私がいきいきと活動に参加できる貴重なもので、たくさんの仲間に会え、思いきつて、これまでのキャンプカウンセラーのサークルを辞めて、こちらにきたことも、これでよかつたと思う。

田口剛

私はよく、空を見上げます。

講義棟から学館へ歩くとき、

美浜の海岸で寝転がるとき、

山のピークで寝転がるとき。

青い空を見ていると、

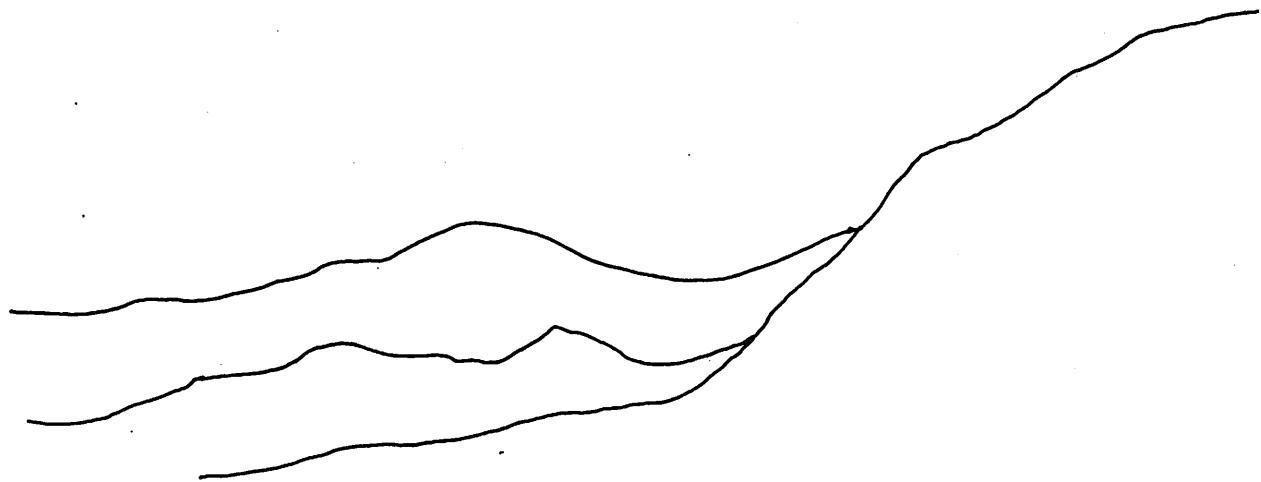
近づき難い存在である、

と同時に、

近づいてみたい、と思う。

私が山に登るのは、

少しでも、空に、近づくため。



登山

きれいな景色を見るため 私は 山に登る。
俗世間から離れた一時を 過ごすため 山に登る。

高い所から下界を見ると 自然の広さに 人間の無力さ、儂さ等を感じる。
その一方 その人間が 自然を破壊しつつあることに
申し訳ないような、悲しい気持ちにもなる。

山小屋があることに 何か遭った時のことを考えると とても心強い。
そして そこに同じ人間がいることを思うだけで 安心する。

しかし その山小屋がホテル化してしまったら
情けなく また、そうしてしまった者が同じ登山者だということに 腹が立つ。
人間はなぜ 便利さを追求するのだろう。
自然界に来たのなら 自然界の法則に なるべく従おうとするのが
本来の登山者だったのではないか。

俗世間から離れて 美しい自然が 恐いと感じるくらい 他に人影もなく
自然の音しか聞こえない時 私は いろいろなことを考える。
普段はあまり考えないことを。

ちっぽけな人間の中の 私が この世の中で どう生きていったらいいのか
大自然の中にいると 小さな悩みはばかばかしくなり
自分を大きく見せたい という衝動にかられる。

山の中で生まれた人間は 山にいるとき 自然になれる。

小澤 由紀

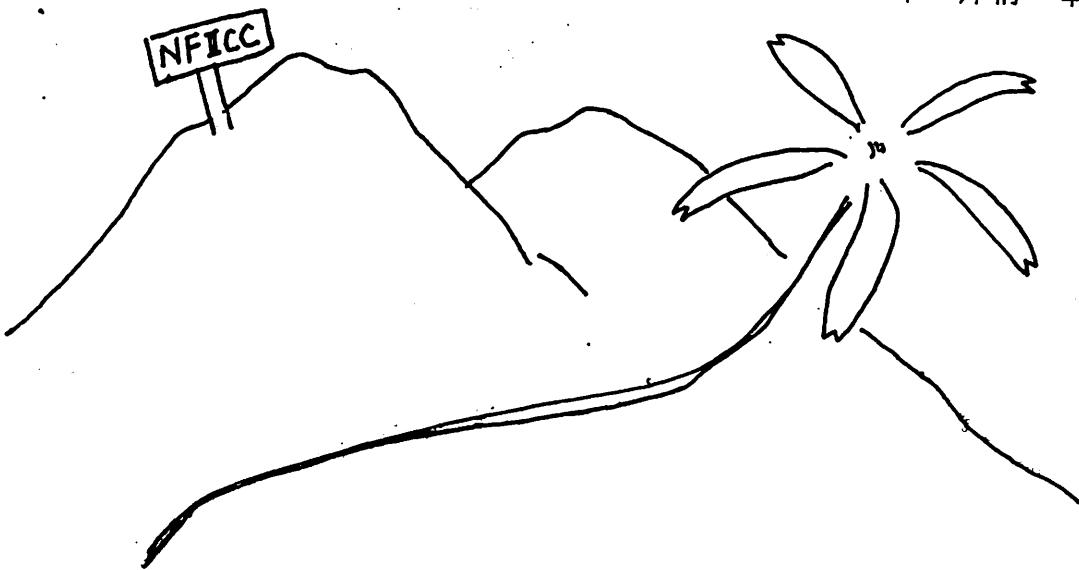
私は今年の4月に大学に入学し「何かを見つけよう」と思い山岳部に入った。入部してから半年たち、私なりの山に対する思いに戸惑いを感じながらも行けるときには出来るだけ参加している。

初め、何も考えずに登っていた私が、いろいろ考えるようになったのは竜ヶ岳山行の時からだと思う。道に迷ったとき、その前から、私はリーダーや他の先輩達に頼りきっていた。もしその時メンバーのうち一人でも転落したり、自分一人になってしまったら私はどうしていただろうか。

一つの山に登るにしても今私は軽々しく登りすぎているのではないか？ただ登って、それでおしまい。目標無い今まで、何も見つからないまま四年間過ぎてしまうのだろうか？今はよくても後々、後輩が出来たときに私はどう引っ張っていくのだろうか？入った目的は自分中心の軽い考えで入ったけど、この頃山の重さを感じることがある。時々、山に登っているとき、本当につらくて「こんな場所で私は何をやっているのだろうか？」と思うことがある。でも、山岳部に入ったことでいい思いもしたし、つらい思いもした。だけど、全部山岳部に入らなければ味わえない体験だと思う。頂上に着いたとき、一つの山を登り終えたときの、達成感がいい。そして夏合宿の縦走中、山々に囲まれて、気分がよかったです。自然のすごさと、人間のすごさを知った。

これから四年生まで、きっとまだまだ色々な山に登るだろう。四年生になったとき「山を選んでよかった」と思えるような山行をして行きたい。

一年 片桐 幸代



どうして山にはまったんだろう。

私はごく軽い気持ちで山岳部に入った。他にもⅡ部サークルに入っていたし、キャンプ系の学外サークルにも入っていた。こんな言い方は真剣に山に取り組んでいる、または取り組んでいた山岳部部員の方々にめちゃくちゃ失礼だけれど、適当にやるつもりだったのだ。山に登るに意義や獲目は必要ないと思っていたし、ただ軽く「好きだから」が山に登る意味になると思っていた。「好きだから、やりたいから、登る」という考え方は今でも変化していないし間違っているとも思わない。ただ、以前は多分事故らなければこんなに深く山に登りたがっていることにも気づかなかっただろうと思うぐらいに、何も考えずにいたのだ。

私の両親は昔から私がやりたがっていることに危ないからという理由で反対しなかった。そのかわり、やりたいことをやるにしても逆にしても、自分のやっていることに対して責任を取れるようにと言ってきた。夏合宿の帰りにはずっとこのことを考えていた。事故を起こし、山岳部員をはじめとして周りの方々に迷惑をかけまくった私が取れる責任とは一体何だろう。「事故を起こした者はその原因・対処法を追及し、後者が同じ事故を繰り返さぬようすべきだ」という文章を読んだ。でも、今の私にはこれすらできてないように思える。自分がやりたいという気持ちだけで動いて人に迷惑をかけて責任は取らないということは、ただのわがままじゃないだろうかと思う。考えれば考えるほどこんがらがって答えなんてわからなくなる。

それでも、山に登りたいからという気持ちだけで私は山岳部部員でいる。今はその事実を大切にして行こうと思う。

ながい ゆき

山岳部に入部して

長嶋初重

私はこれまで山には全く縁がなく、あえていうなら小学3年生の頃、富士山に5合目から6合目（？）まで登り、お土産に岩石を持ち帰り配り歩いていた、そんな思い出があります。それ以外は鈴鹿に住んでいながらも、縁どころか興味さえありませんでした。しかし、知人があまりにも「山はいい、いい」と言うので、うらやましくなり、一度私もその「いい」というものを体験してみたいなぁ、と思っていた時に山岳部に出会いました。

しかし、最初は山岳部に入ったということだけに満足してしまい、登るということには何となく興味はあったものの、それほど気合いが入っていませんでした。さらに「山はいい」ということは「山は楽しい」としか解釈していなかったのです。そんな軽い気持ちで春のオープン山行に参加したものだから、そのあまりのえらさで「だまされた」「甘かった」としか思えませんでした。

なのに何故“単合宿”や“新人山行”に参加したのでしょうか。どうして、今ここで懸命に無名峰を書いているのでしょうかね。よくわかりません。「山のよさ」も未だによく分かりません。

頂上から見渡す素晴らしい景色でしょうか。自分の体力と精神力に挑戦できることでしょうか。偉大な山に登りきった時の充実感でしょうか。自然との一体感でしょうか。それとも部室で山行計画をたてている、ちょっとした緊張感でしょうか。あるいは“部室”という行く場所があり、徒然帳を読んだり書いたりするあの何気ない学生生活感でしょうか。そう思うと、山はもちろん、山岳部って、魅力的なのかもしれません。

しかし、寒くて、えらくて、不便で、重くて、おまけに数ヵ月分の滞納した部費の請求がお金の無い時にきたりなんかして。。。そう思うと、山はもちろん、山岳部にいることを考えてしまいます。

そんな感じで在籍をしていますが、少なくともいつも感じ、思うことは、自然が相手という緊張感と、仲間づくりというものを大切に考えたい、ということです。私はあまり山岳部には積極的でないので偉そうなことは言えないし、難しいことは言えませんが、皆それぞれ考え方も、やり方も違うけれど、山という共通の目的をもった一つの仲間として良いつながりをもっていきたいと思っています。

ちょっとまとめがヘンになりました。

おわり。

徒然帳から

— 1973年～1995年の徒然帳からの抜粋 —



1994年8月 北岳に行ったら鳴らしましょう。

♪あの鐘を鳴らすのはあな~た~♪

※おことわり

過去の徒然帳の中から青春の薫りのするものを勝手に選ばせて頂きました。
当時の執筆者の方々、ご了承下さい。

○うたひませう
穂高よさらば

はながよ エラ - ば またくろひま - て
E7 Am
おくほに - はや - る あかね - ぐ - も
Am Am Am
かえりみすれは 遠ざかる まぶたに浮かぶ カ - 3
Am E7 Am
まぶたにう - が 3 シヤニ ドル う
Am

1. 穂高よさらば また来る日まで、奥穂に映ゆる、女かねの
かえりみすれは 遠ざかる、まぶたに浮かび シャンシャン
2. 穂高よさらば また来る日まで、北穂に綺く尾根づつ
かえりみすれは 遠ざかる、まぶたに浮かぶ 槍ヶ岳。
3. 穂高よさらば また来る日まで、西穂に綺く雪の原、
かえりみすれは 遠ざかる、まぶたに浮かぶ 田代池。
4. サイレヤヒコ 登る岩、若者達の、かけ声に
はづかで登る槍の道、あめ美和しま 槍ヶ岳
5. 夕陽に燃える白樺林、肩を寄せ合ひ、歩く道。
ハツカ 夕陽くじけ行く、あめ美和しま 大正池
6. 穂高よさらば また来る日迄、明神山の、岩の肌
かえりみすれは 遠ざかる、まぶたに残る ドルセ
7. 流れす清い、梓川、雪割草の花びらの
朝もやの中 流れ行く、あめ美和しま 上高地
8. 燃るよさらば、又来る日迄、独標はるか 岩山界
かえりみす山界、遠ざかる、まぶたに残る 大正池

詞・小林銀一
曲・小野岳人

涸沢の歌

The musical score is handwritten on ten staves. The vocal line starts with a C major chord, followed by a G7 chord. The lyrics are:

3. うたおわたり わかり うさ
けたおね い おう うたう
G7 F G G7
4. あはり せせらぎ
G7 F G G7
5. はだか
G7 C F C F C
6. おやま
G7

1. 長い冬が終り、日はやるく、アリスード
北尾根に、奥穂高に、緑。もと國、美しい、美しい、穂高の山よ。
2. 白い花をつけ、あわい、光と、なげかけた。
北穂高、下りて来た、美しい、乙女よ、えわやかな、土がやかな、夏の日の恋。
3. 赤く、深き山を、一人ヒューティ、みつめていた。
夜せ、更け、星を降川、歌聲か、南にえま、なつかしい、なつかしい、涸沢の夜。
4. 作詞者の小林銀一氏は、涸沢とコトテの支配人、あります。

書いた人：大吹シヨー

ハガ岳に思う。

もう山にっぽり はじめてから 約6年になる。

高校時代には

…にふさわしい山か…

21才には 21才のぼり方か…

そのときにおりじて、自分の年に ふさわしい山かあるのだと思う
わたしにして ハガ岳は…

赤岳鉱泉は…

よく一人で テントをはた。

仲間か 感しくなって

仲間で 歌いたくて

仲間で いろいろなことをしたくて

それで じつとがまんして

一人は寂しいこと よくわかっているのに

わたしは いつも 一人で ハガ岳にまてしまふ

6月のハガ岳は

朝は道がこよけて

横岳のところは あふれない

午後から天気くずれやすく

雨からヒョウになりやすい

10月のハガ岳

御来光かすはういい

寒さに耐えながら じっと太陽が顔をたすきを
待っているのも 又いいもの。

午後硫黄岳からみる雲海もきれい

赤岳鉱泉か 牧場のようだ 神秘な感じにみえる。

11月初旬

雪はないけど 朝の寒いこと

テントは もちろん シラフカバーまで

ぱりぱりとにこおって立。

ボリタンの水こおっていて てりたすのに こぼれてしまう。

吊り屋までおみやげにもちかえる。

阿蘇院の頂上で 北アルプスは雪じよ白。

南アルプスのノコギリ岳 すばらしく 美しくて

2時間頂上にいた。

2,24 AM 2:24

昨日、社会保険論の検証試験を受けた。午後。

見事な、ほとんど世界が大騒ぎで騒ぎ出しました。カクライ10
ヶ所、今の一ヵ月と千田から札を列へるわけですか。

イヤロウタケダです。年一歳の誕生日。

12時頃下町来と吉野家で食い、喫パワードに行き、その後Boxへ帰って10分位してさあ、帰ろうと外へ出たのでありますか

ナホー、と軽く感じ、今日はBoxペパークと選定しました。+T.アライ。

ニニだ」とストーンがコクテイド。尤類量タダないに、とても気に入ります。ハイ。そして寄贈してもらった本を読んでありますか。中には

はとんとアハもありましてみんなの今後の山行に役立つのが沢山
あり、ネムネも参考して下さいました所先輩方に感謝の合掌をしてある

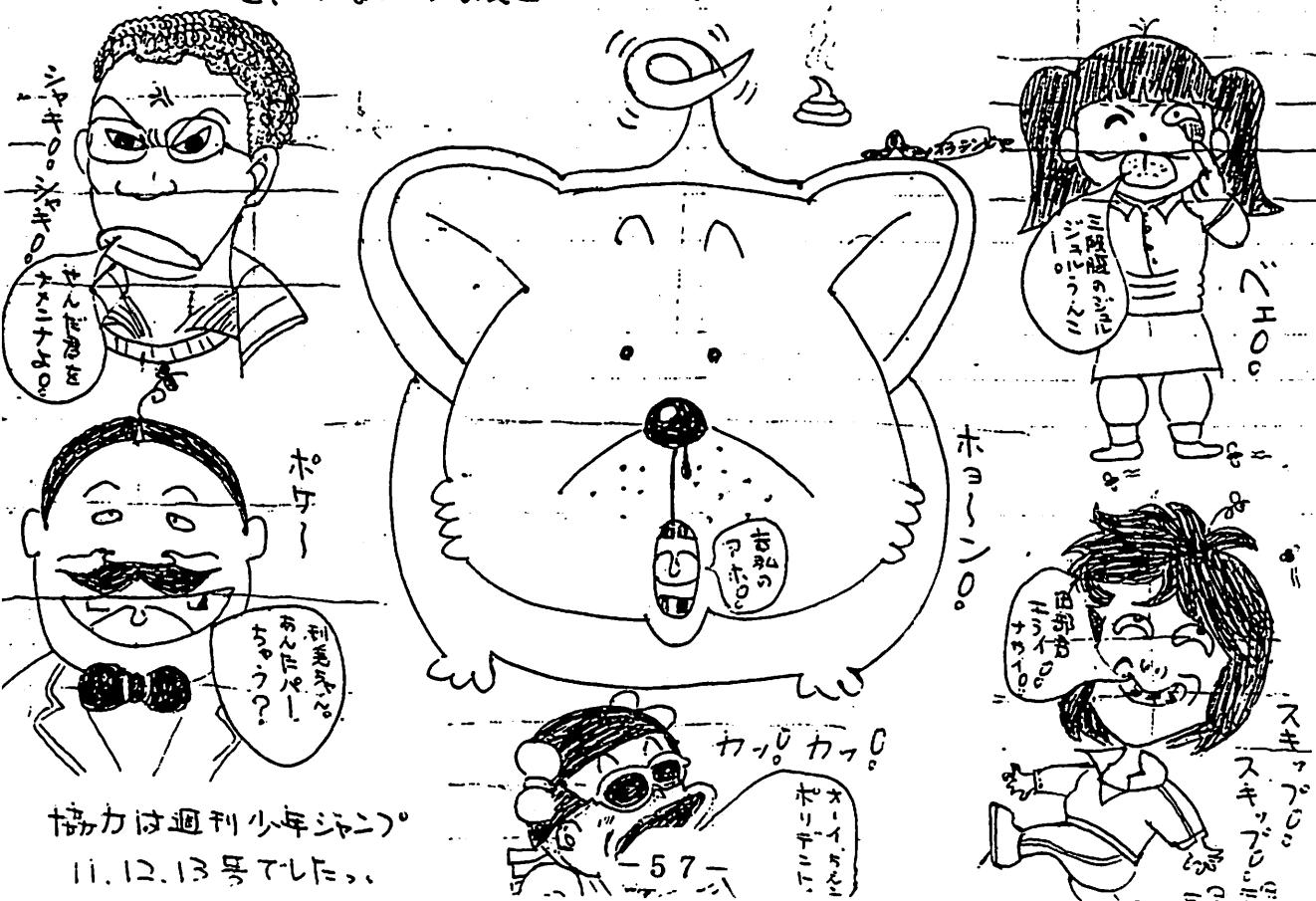
いてあります。おはようございますかー一年の1月2日。12時過ぎにネコといふ子の子供youを尋ねて来ましたせ。もうとく下り帰ったよ。とおもしま

すると、多分そうだったと思ふた。と書いて出て行つた。4.5日前にも12時

娘一人で本を読んでいますと尋ねて来た。あの子は、太い何やら、どこのかえ？
そういう區分こそ何やら、どこのかえ。と自分で聞う。ホレホレ。

日々どう近況を書いてありますと、寝むくなってきた。もうねる。アーフー。
といいながらも漫画を描いとる。

A black and white illustration of a small, round character with a single large eye, wearing a small hat and holding a sword. The character is surrounded by a circular motion effect.



81.2.27. (金) 旅に出お

テトとシユツの入ホザクをしまい
ホトトは一箱の煙草と笛にも
旅に出よう

出発の日は雨がお
霧のうちにやわらかい春の雨の日がよい
前も出でた若芽がしづかとぬれながら

さて富士の山にあるとい
原森林の中 やこう
ゆくりとあせることなく
大きな木の古木にまたい
一層暗い か根本下腰をおいて休む
そして独占の機械工場で作られた一箱の煙草を取り出で
暗い古樹の下で一本の煙草を喫よう

近代社会臭いのす か煙を
古木よ おれは係思ひが

原始林の中にあるヒラ湖をさがそ
さて その岸辺でまたまく
一本の煙草を喫お
煙とすべて吐き出で
ザクのガタカタと静かに休む

原始林を暗やみに包みこむ夜に歸る
湖上 小舟をうがべお

衣服で腹さみて
すべりがち肌をやみにつみ
左手た箇ともて
湖へ水面を暗やみの中漂ひながら
笛をふこう

小舟の幽ひあるうつしのせめきの中
中天より涼風を肌に涼させながら
静かに歌う

さて まだ笛を深い湖底に沈ませよ

二十歳の原点 高野源吉

9/9

群馬から帰ってまいりました!! 久しぶりで、すみません。まだなまです。
 尾瀬へ行って、美しい思い出をつくりてきました!! あれ~~~
 あの青い空! その中をかけめぐる真白の雲! そして、思わず目を
 みはる木々の緑! どうしても今年の夏はこの3色が絶対見
 た!! 夏合宿の北アルプスでは見られないから!
 今、季節には秋へ向かってかけだし始めたところ……
 俺の大好きな夏はもうあり……
 いろんな思い出を今年もいっぱい胸に収めて、俺の心もいつの
 間にか秋から冬へ……
 目をつむれば、あの人、二人、顔・顔・顔
 「ありがとう」そして「さよなら」また来年も夏がくるぞ!!
 今日はこのへんでささいながら……

おつかれ

昨年夏合宿で白馬から種地まで徒歩した。白馬の頂上に着いた。
 その直下に見える白い花、左下ろをみても、左下ろを見ても、普
 通は見えないような花でも私はくっきりと見えてしまうや!!
 花、花、花!! 白い花、私もあの白い花のように……
 毎日10kgはげもう。—— 嘘海の両手

この徒歩帳の 12ページを見よ。!!



マ-1のところを見よ。!!

マセタ=いやもとだら~。
 マル+ル=へいやめもかこ~。

山口 大阪は 傷市で
真如苑バッサの人に会いました — !!

1986年

6/26

「山口さんへ 日記帳」に 山口さんより 早く 手をつけて
しました。これは ぜひ 山口隊長以外の 日記帳に
する二つを セカニ 切りに 祈りました。

1年生三七、

どんどん 参加せよ。せよ…せよ

教育実習 面白かった。

教科担当の先生が、山とバイクにあこがれる少年みたい
い人で、オナシが 何時もかけて 作成教案を 1枚
も見たら「王.よいこよう。それより…」といふよりも
てくるのが 山の地図。

「ニニの道には レンゲツハリシが あれ…」とか

「ニニの 鎌場は オーナー。ニード…」とか。

その先生、みんなに おもてんしゃで 生れた我が子
につけた その名も 一郎・二郎・三郎。これほんまよ。

「早く 息子さんが 大きくなれど パッカ勇農になってくれると
いいでやね」と言うと、「答えることに…」

「いやあ、横着よ 親には、横着なよしか 育たんもー可」

ちゃんちゃん。

4年T2, T25 Boxが 遅くなりました。

三月のも いやだ理由のひとつだけと (セミ室は やっぱ
キレイ!) 4年にしたら やっぱり 卒論とか 就職
とか 気に 痛んでしまう。卒論を持て 卒業したい。
(セミ員合同執筆のサトーン総論)

BONと 寶が 屋瀬へ 行く仕度(準備分担)中。
いいだよ…… 高原の 美少女 2人旅…… うつし。
いいだよ、しゃい…… と 娘との 視線と ある 玉川

7/13.(月) <も、T=1.3、T=1.4> した一日! 1987年

コノ日楽しかった。みんな楽しかった? さくないに樂しくて
たようである。私は気がついたら、大塚Bon隊長のところへ来て。
えいえい、車にのってどこかみ、ような... そんなことはうご
もい。こう暑い日がつづと毎晩でものみに行きた。ビールでテニ
ス。みんなつまらなくて。私はいつもモード。

今バイトT, こう楽しい。はんやのあじさんか、「おまえはアーニー
か」「え、どうか? どうか?」しかいから。」とみんなと、た。そういえば
どうだ? と返す言葉がなかた。今日は風休みに、先日の前でモ
チ(もう)に。すれ、てたら、板前のあいちゃんか? 「ビールまだ? カキ
と青、てくれた。素直な私は、すぐには「うん」ビール350mlを
して。私はその後、パクパクに働きてしまつた。かえりがT: はんやのあいちゃん曰く、「おまえの横でや」ととこ、ちまきあ
せ、2つもすごい馬力やなあ。」と。ふん、いんて、いんて;
といしか? 女の子に言うとか。みんな今日は風休みにPILLOW-LINEと
潤滑油が入つて。バーバーハイ! 働かれてまたんや。ふんふんふん。

Gu.Gu.♪

7/13

この日は朝から汗が止まらない
もう気持ちはまるでまるで。
しかし2時頃も電車にのって津へ行ったけど。
近畿圏のところ時計が、17, 18歳になつて、2回2
度もこういふついたら
1日中遊んでいた。
やつは11またまた20。
若い若い。

またまた

7月28日

MALKIN SPECIAL PART 7

HIDETOSHI MURAKAMI

最近 WSF に興味を持ったマルキン。可能な時は津へ行つて WSF を楽しむ。こんな自分に「山へ行く気持ちはうせたのか?」と聞くと 私は下に向ひてしまう。

ひとつすると山へ行くより WSF の方が楽しいのは、だから、去年だつたら山へ行つていた日曜に WSF をしていたがもしかつい。しかし 私は どう思つた? といふ。

岳人でもあり、W.H-F-A-G-E もある 木村英俊は 云ふと すぐきる。OUT DOORS MAN だとう言つてゐる。

気のせいかもしれないが、最近 T.V を見つけるとアウトドア関係のテレビをやつてゐる。何が自分が。

同じようなことをやつてゐるといふことどうれい気分である。WSF も楽しいが やつぱり 自然とのふれあい気分をもつねえ、た NFICC。つゝと書く。

うつは、非常にしゃわせたよ人間である。

山登りや岩登り、冬山・春山・夏山、日本で2番高い北岳、W.S.F. やジエット・スキーリングや、ワットボーラーなど公式戦をやつて JAZZ によく参し、TP で歌ふのがうつはよくて努力した。しかし、はいがんばつていい。木村英俊にホクはすこくうらやましい気をもつてゐる。もう一度生まれ変わつたら? と聞かれた。

ホクは 木村英俊がようが人間になりたいと答える。そして 最近 NFICC の BON さんが JAZZ にこだわつた。しかし、ジャズ喫茶 MALKIN の復活だ。

JAZZ JAZZ JAZZ 私は JAZZ FAN でよがた。思つた。もし今度、もう一度生まれ変わつたら? と聞かれた。ホクは、レバーランストロングのようが人間にこだわつて答えた。

1988年

1/19.木 PM 7:30.

立部山岳部はまだ始動しとらんから、誰もBOXに現

今日は誰も現れないのか、室内は静か。もう正月気分もす

#反応 '88 もいよいよこれからです。BOXに来ても

突然中止がせんせん進んどらんのは怖いもんな。

いい立部員は何をしどうか。やはり立部屋

二三日に入りながらテスト勉強をやっているからだ。

まあ、立部員といえは立部員でさ。

立部山岳部にいるのも又と1月ほど」とは、

あと何回立部山岳部員として山に登るか?

OBからの年賀状によると、正月も山に入り、213人が何

いよじてうれしい。最近は中高年者がどんどん

山に入るようだ。反面若者

OBの藤田氏はとうとう3-0...10アルバス - 2...7-3.w

へ立部に行つた。(写真付き) この写真なんか合成

写真、18°(11月)もなみ。

大学生活最後。山行。山行2...ナガリ7-11。

1/20 (月) おはよう やー! 今日はバトで足がいい!!
 フィットのむすび

30Xにきた。ほんまにあんのかい? まだそれもきてはーいんだなあ
 これが。オレのカンチがい? まあ、あっても、わかしくはないモンネ。
 で、中野宅は、部屋のもよがえをしたのでちよびうと
 広くかんじのよがえにきたんだな、これがまたかばう。だからあ
 あんたで あそびにきてもうつてもお、バトで おうへんのビナあ、
 これがちよーん。



1月3日 めでてごす

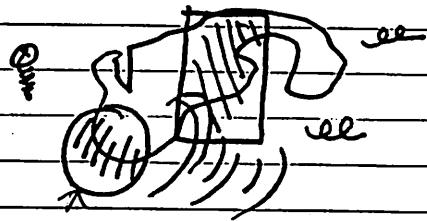
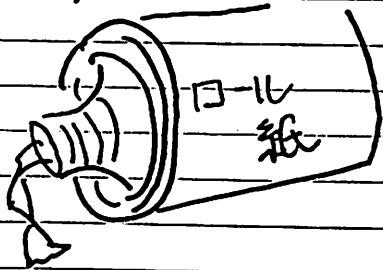
1月4日 めでてごす

1月5日 友達とか。浪人生はビス入や。

1月6日 新幹線及びOB会 ひしょりにうまい酒
 そのあと オールナイトドライブ・初もつで!!

1月7日 AM 6:00に帰宅したから めでてごす。
 1月8~10日 そら中、さいば。1日平均 15KM,

このBOXは いつまでも ハイが 五月花。



中野義治、今年1年は、とにかく(空)な1年になりや。

人生80年、明日死ぬかもわからんのに 今日を捨ててどうして生かす
 人生で60日目がたのへ 今度も過ごうの 今日のためには 明日を生きよう。

ねむすび。今日もハイコトをみよ。

(2月17日)

NFICCの動き。

ハーレンタインマーも過ぎ、みんなヨコレーといふもんだった?
とききたいが「誰もいす」。ちなみに私は病院へバイトがあるのですが
さいわいさいわいそこになじみのメニバーには義理のことをもらっちゃって
ホッとした14日ですが。この病院上以外からは誰もくれませんでした
山岳部の糸工3点。(IZUMI, FUJIMOTO, MIYAMOTO) からも、今だに
なく、まあんなもんかといなが、14日の日はフット・ランナー
になりました。

さてサークルもまた、木村上陣管が指揮をとり来週で大演劇陣管に
変わります。総括も、なんか進みはじめ、よくれました方。
来週に集中部会に突入いたします。

(ガレ安計が……)

まあ、帰ってきてからああせえこーセえって言わんことやな。
あなたがく見守もってアドバイス、3年生のみんなさよろしい?
不安はあるだううけい。

でも4年生になつたら直角だけ見せてキャラキャラいかない。
からわれみて。

責任は彼らにうつるわけだから4年生はひきんや3. 後うも。
死ぬつもりでほくらは目をつぶして彼らにまがす。

そーしなきゃいいました、でも立派で、山岳部になりません。
20年間つづいたサークルでさから、いろんなことがあつたんじ
部員が1人だった時もあつたそうです。そしてほくら現3年が入る
まじは、このサークルも今まで(質はちがうが)停滞していました。
これからづーと続く、このサークル3年後5年後はあるいは30周年
まで金としないNFICCのセッションが市民会館で行われるようになら
がもあかりません。みんながんばりましょう

4. 20 (木) 久々のBoxでござる。しかし、まだ、1か月ぐらいいしか、尼、2回目の2。
感懐、情け、とくにそと、わきませんけれど。公開サークルの最終日はと、jazz
チ、せにことわれ、遊びに遊びました。また、仕事はじめで、1ヶ月弱で、
本当に新米の未だよ。妙にやる気が失せてます。

新入部員、今年は、どうがため。一緒に山へいってみたいよ。
春合宿、がんばって下さい。気をつけてね。クラス隊長はFとTと
Tとが大変そうですね。と、ひと音みたいに、いきなり私は、やがて「」も。
O.B.ですか。

今日は、すごく一杯やりたい気分「ぶんF=IT比」、明日、朝早いし、一番で帰るのも、まことにいいから、どうしちゃうかといひがみ。みんな、名古屋にあとびにきてFさう。の間にいきましょ。いい感じといひ、ぱいあるし。

老人木へいにけ。おもしろいおしゃべり、はみだらうかーい子す。

時代劇で23ときたに、部屋は1F11、2、3F12が高価な17と。23と11と
自分2F12F11とある。2F12がF11のむと「おうじ」といふ「なみ」という。3F。

目がちいと悪い(アホもんには、ちうと)裏返して、一生の命、そげにござり。

大ぐらいの17歳5ヶ月12日。テレビで見て。“日本は人間が生き残るにはどうするか”と云ふ。ビデオ。二年後。5月21日。5月21日(か)食べさせたから帰った。と云ふ。テレビで見て。毎日。5月21日(か)食べさせたから帰った。

とかの組合せで、T=4.71, じいちゃんは7.1, いいだ, TECでオーバーとみて22.無表情です。でも、時々、笑いつけて3と、これでどうに笑います。

いさんさん、人生がまた、新しい。知らなかった場所だ。今まで見たことない。なんか、新しい情報があり、たら、教えて下さい。

1988年

10/4.(火) 久々のBox。しかし、汚ない...。皆さん、お元気ですか。

来る度に、汚ないこのBoxに私は下痢で、愛着を抱きつづります。

ごらんごらん机の上に、徒然帳を広げてスペースを取って、腰をあぐら

へ。2時に、マイスオーラを飲む。「なんか好きだなあ。」2時。

突然、子せが、登場すると最高みたいと、まあ、なんか、私も
突然、登場してしまった。

私は、3:30、徒然帳が好きです。今度、新しい時は
3:30の間に下さる。

皆さん、山行、ですか。いよいよ、企画はありますか?...

10月30日 朝7時から下北山清掃山行、もしくお邪魔で7時、2
ひまうつたら、参加させ下さい。

さて、私は 10/8の夜、名古屋で 9~10と八ヶ岳に
行きました。7時と一軒に。美濃戸口～赤岳銛泉～赤岳～阿弥陀
～美濃戸のコースをとりました。で、今日、Boxをおとずさんだよ。下
りで下りでお借りした、と思、下りで、家で出でた時、村上タローハイ
テルしたる四者や、23時まで。誰かが会えるかなと期待しておつり
一足遅か、7時。今、一人、Boxはい。早く誰かに会いたい。

95年度
日本福祉大学 II部山岳部
方針

一はじめに一

私たちは、山を愛し、一人ではできないことを多くの仲間の力でやっていこうとする集団である。その歩みは、24年を経て大学移転を数えて、13年を迎える。

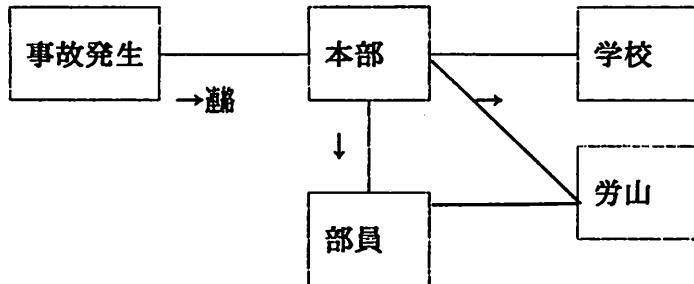
この24年間に蓄えられた山岳部本来の、常に山へ登り続ける姿勢を忘れてはならない。

《方針》

幅広く、創造性あふれる山行形態に対応出来るサークルを目指し、自然に対する謙虚さを忘れることなく、常に安全登山を行なう。

《年間計画の方向性》

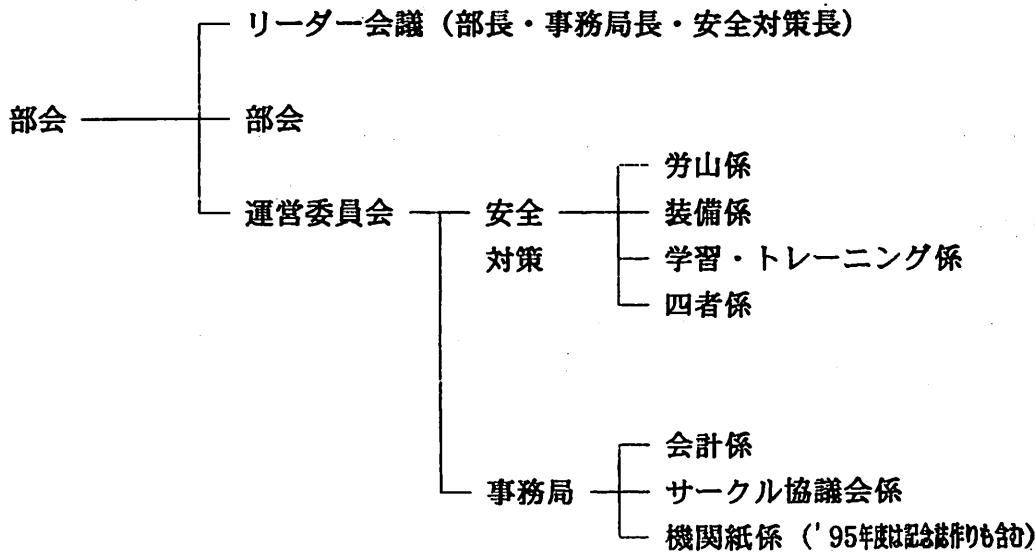
- ◇全般的な意志疎通の場である部会を最大限に活かしていく。
- ◇部の企画には部員一人ひとりが積極的に取り組み、全員参加を心がける。
- ◇遭難防止のに努め、また、発生時対策を確かなものにする。



- ◇部員全員がサークルに根づけるような雰囲気づくりを心がける。
- ◇体力・技術の向上を目指す。

1.組織

本部には次の機関が、図のような位置づけでおかれている。



2.機関要旨

部会◆ 本部の山行面においての最終決議機関であり、本部の唯一の決議機関である。
山行計画・報告、諸連絡、運営委員会、その他の話し合い、が主な内容である。
原則として週一回・月曜日に開くものとする。その際には、できるだけレジュメ作りを行なう。

リーダー会議◆ 本部の二つの運営委員会（安全対策委員会・事務局）の長（安対長・事務局長）と、部長、二年生一人を中心にしていく。（希望者の参加は可）
次部会の内容決定の場とする。

運営委員会等諸活動◆ 学習会を中心とする。その他部会で出来なかった事柄を行なう。
原則として週一回・水曜日に開くものとする。

(安全対策委員会)

労山係◆ 労山の組織活動・連絡・交流に関わる仕事をする。

装備係◆本部の装備を管理する。

四者係◆四者委員会の組織活動・連絡・交流に関わる仕事をする。

3.合宿について

部の意義◆ 部としての力量の確認の場（目標達成）、意気向上、活発化、部員の信頼感、協調性の向上、学習・トレーニング成果の確認。

個人の意義◆ 部員としての自覚、技術・知識の向上と自己の到達点の確認。

☆春合宿◆ 在部生間の意識向上の場とする。春休み中に始動。

☆夏合宿◆ 幅広く創造性あふれる山行形態で、特に新人養成重点をおくものとする。年間で一大イベントとなる。

☆冬合宿◆ 冬山での安全登山を目指し、雪上訓練で得た知識、技術を活かす場とする。また、一年間でつけた体力の確認。

合宿の活動方針

- ◇原則的に全員参加。出来る限り合宿の日程を優先。
- ◇合宿の目標をもつ。
- ◇日程をはやめに決定し、合宿の準備はテンポを守り、2ヵ月前より行なう。
- ◇冊子完成は合宿の3週間前まで。
- ◇学習会・トレーニングの実施。
- ◇報告書完成は、合宿日程終了後2週間以内とする。
- ◇報告書完成までが合宿である。

4部としての企画山行とその目的

オープン山行◆ 学内の人達と山に登ることにより、交流を深めるとともに、学内の人達にも山（春・秋） 登りの楽しさを知ってもらう。

新人歓迎山行◆新人部員歓迎、親睦を図る。

清掃山行◆山を美化するなかで自然保護をアピールする。労山との交流を図る。

準合宿◆新人に幕営生活を経験してもらう。

歩荷◆合宿を前に個々の体力・気力の確認と自信を養う。

雪上訓練◆積雪登山における雪上技術・知識を体得することで安全登山の確立を目指す。
冬合宿前に必ず経験しておく。

(歩荷・雪上訓練については義務的なものとする。)

新人企画山行◆新人間の親睦を深め、力量確認の場とする。これを行なう事により新人の個人山行を認める。

四者山行◆三団体（ワングル部・アウトドアライフ研究会）との交流を深める。

5. 1995年度 活動予定表

95年度	山 行 計 画	行 事 予 定	
4月		サークルオリエンテーション 公開サークル	
5月	(春合宿) 新人歓迎山行 春のオープン山行	新入生歓迎コンパ	記 念 誌
6月	清掃山行～労山～ 歩荷	II部山岳部O B会	作
7月	準合宿		成
8月	夏合宿	夏 休 み	期 間
9月	新人企画山行		
10月	秋のオープン山行		
11月	四者山行 雪上訓練 歩荷	大 学 祭 四者コンパ	
12月	冬合宿		
1月		集 中 部 会	
2月		(総括・方針)	
3月	(春合宿)	追コン	

6. 活動方針

【事務局】

◇会計係

今年度の集金

部費：月々 500 円（月々 10 日までに納める）

労山費：月々 250 円

遭難基金（労山遭難対策基金）：5,000 円

（新入部員は新規加入金 500 円プラス）

・遭難時の為の積み立て * 4 年生は集めない。

安全対策費：月々 100 円（年間 1200 円最初に 1 年分集めます。）

四者基金：年間 500 円（四者での積み立て）

◆労山の集会に出席する為の交通費は支給します。

◆サークル援助金の請求

◆会計報告

◆部費、領収書の管理、雑誌・備品の購入

◇サー協係

◆部員にサー協とサークルの位置づけを認識させる。

◆自分達のサークルをアピールする機会を持ち、学生に II 部山岳部の存在を知ってもらう。

◆リソグラフの管理

◇機関紙係

◆無名峰を新歓号と追コン号の 2 回発行する。

◆山声人話を春夏秋冬に発行。他、活発に発行する。

◆25 周年記念誌の責任をもつ。

～雑務～

◆レジュメ等のプリントの印刷・コンパの企画。

日本福祉大学Ⅱ部山岳部OB・OG名簿

1995年現在

卒	氏名	〒	住所	☎
78	懸 武子	456	名古屋市熱田区1-3-2-30市営一番荘3-401	052-671-5275
87	赤井 英明	529-03	滋賀県東浅井郡湖北町小倉742	
	荒木 加代子			
	秋積 孝二			
81	秋山 ゆう子	535	大阪市旭区太子橋1-27-11ハイツエグ"202	06-953-6079
76	阿比留貴久雄	189	東京都東村山市青葉町2-38-8フミネス米川1304	
79	美知江	"	" (旧姓 吉田)	
	飯島 茂樹			
82	家近 ルツ子	862	熊本市京塚本町48-15	096-385-6835
	和泉 晃			
	一戸 健吾			
81	伊藤 忠芳	946	新潟県北魚沼郡小出町青島7331県住21	02579-2-6558
	井上 覚	487	愛知県春日井市岩成台6-2-1 36棟105	0568-92-6291
80	猪又 康行	239	神奈川県横須賀市舟倉61-5	0468-42-5467
	今泉 邦夫	487	愛知県春日井市中央台7-8-3	0568-91-3650
	岩波 徳子		(旧姓 枝植)	
76	鵜飼 栄子	462	名古屋市北区苗田町3番地 (旧姓 加藤)	052-901-0716
	上田 美智子	198	東京都青梅市根ヶ布2-1370-182 (旧姓 当真)	0428-23-5049
82	上野 利美	899-27	鹿児島県日置郡松元町上谷口1676-1	0996-57-0756
93	上野 琴代	289-25	千葉県旭市イの1326第7清和寮	
94	江角 太	699-04	島根県八束郡宍道町1256	
88	江口 正美	632	奈良県天理市杣之内町1050	07436-3-0859
	押忍見 哲也			
93	岡本 哲也	153	東京都目黒区上目黒1-25-7日本赤十字社友愛寮401	
88	岡田 忠	611	京都府宇治市槇島町南落合47-72	0774-22-0087
87	由岐子	"	" (旧姓 有馬)	"
88	小野 浩二	793	愛媛県西条市喜多川368-5	0897-53-2465
	大崎 武文	215	神奈川県川崎市麻生区高石4-16-36 310	
77	大島 しげ子	454	名古屋市中川区富田町千音寺497-41 (旧姓 渡辺)	052-431-7971
88	大塚 直美			
	大西 充芳	278	千葉県野田市宮崎82-5-1-201	
93	大沢 克巳	254	神奈川県平塚市袖ヶ浜20-39 227	0463-22-9426
94	大矢 英信	478	愛知県知多市八幡笠廻間12-339	
	小川 あき子			
85	小川 一八	140	東京都品川区大井3-15-2ハイウッド206	

日本福祉大学Ⅱ部山岳部OB・OG名簿

1995年現在

卒	氏名	年	住 所	△
76	笠原 富美雄	465	名古屋市名東区一社3丁目60-2	
81	風間 淑子	354	埼玉県富士見市渡戸3-16-14 (旧姓 三橋)	0492-51-5261
77	柏原 一彦	465	名古屋市千種区香流橋1-5-28	052-776-5689
77	加藤 康則	483	愛知県江南市松竹町向島108	0587-54-2681
	門脇 真紀美	380	長野県稻葉2086-4 (旧姓 市川)	0262-21-8947
94	亀井 孝子	330	埼玉県大宮市天沼町2-1037ときわ荘202	048-649-5246
77	片岸 昌晃	358	埼玉県入間市扇町屋1-10-10霞台団地1-302	03-3789-8590
77	片桐 治	399-45	長野県伊那市西箕輪5201-10	
77	川相 豊子	299-02	千葉県袖ヶ浦市下新田1680 (旧姓 賀川)	0438-63-5221
84	川田 良彦	509-41	岐阜県吉城郡国府町三川1325-2	0577-72-2485
84	信美	"	" (旧姓 二口)	"
	河本 房子			
	河合 潤			
	河合 康夫			
	北村 武	590	大阪府堺市今池町5-3-8	
	鬼頭 初恵			
	木田 治郎	489	愛知県瀬戸市すみれ台3-19	0561-48-4041
76	木村 久世	470-22	愛知県知多郡阿久比町草木末広31 (旧姓 河田)	0569-48-7304
76	桐原 正明	635	奈良県大和高田市築山546-1 (旧姓 越智)	
	桐山 茂			
	楠 秀嗣			
77	窪田 陽子	399-93	長野県北安曇郡白馬村北城1281-4 (旧姓 石坂)	0261-72-4553
	綾瀬 博子	466	名古屋市昭和区長戸町1-34 (旧姓 坂本)	052-853-7779
	小浜 直弘	779-31	徳島市国府中町268-2	0886-42-1522
	笛川 ルリ子			
	佐藤 敏逸			
	佐藤 ひとみ	470-01	愛知県愛知郡陳郷町御岳1-7-4	05613-8-4817
	佐藤 みどり			
	佐藤 義信	874	大分県別府市南立石本町5	0977-21-6312
	清水 宏泰			
	下菌 喜久代			
85	正崎 勝紀	465	名古屋市名東区若葉台901サルバ名信307	052-777-5294
	白井 光枝			
95	新藤 賢之	467	名古屋市瑞穂区土市町1-39-2 師長荘1号	052-841-8219
	柴田 熨			
80	柴宮 一男	367	埼玉県本庄市北堀450-197	0495-24-8873

卒	氏名	〒	住所	☎
95	杉山 みどり			
95	鈴木 恵	330	大宮市南中丸1156-24青葉荘201	048-684-3311
85	鈴木 宏	473	愛知県豊田市駒新町坂上113-5	0565-57-1576
86	康子	"	"	(旧姓 新宅)
77	粉原 和生	671-12	姫路市網干区高田99	0792-74-2768
95	谷 征広	071-13	札幌市豊平区月寒東一条13八紗寮内	
87	谷口 富士臣	444-21	愛知県岡崎市井ノ口新町3-15エトワールのりみつ2-3	0564-24-5051
	武田 和子			
	滝口 豊之	053	北海道苫小牧市大成町1-56-17マンションD イン6	
87	滝本 祐二	787-07	高知県宿毛市山奈町山田3381	08806-6-0616
82	竹脇 裕泰	501-42	岐阜県郡上郡八幡町五町396	05756-5-5326
83	順子	"	"	(旧姓 桑原)
83	田部 秋浩	882-11	宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井1918-2	0982-72-5953
	田村 行永	370-11	群馬県佐波郡玉村町下新田1150-5	
87	田中 まり子	562	大阪市箕面市桜井1-26-24	0727-23-6833
77	田中 裕子	047-01	北海道小樽市新光1-24 221	(旧姓 田巻)
	高野 勤			
	高橋 智子			(旧姓 山本)
81	高橋 憲常	464	名古屋市千種区千代が丘1番千代が丘団地107-808	052-771-5245
95	高橋 理佳	676	兵庫県高砂市伊保2-4-30	0794-47-3545
	柘 雅代	454	名古屋市中川区中須町206	(旧姓 天野) 052-351-1962
83	坪山 芳樹	616	京都市右京区梅津中村町12-19	
86	久美子	"		(旧姓 義平)
90	照屋 秀文	904	沖縄県宜野湾2-27-24	
87	富永 進	523	滋賀県近江八幡市土田町1038	0748-33-2187
	鳥居 昭夫			
82	長尾 美智子			(旧姓 小松)
	長尾 裕子			
	中島 百代			
	中野 義治			
84	中村 桂子			(旧姓 神谷)
94	中村 大	349-01	埼玉県蓮田市馬込1777-2	
84	西 直隆	470-21	愛知県知多郡東浦町緒川丸池台26-11	0562-84-3024
83	西 永	485	愛知県小牧市城山5-115城山住宅1-505	0568-79-0106
	西川 弥生			

卒	氏名	年	住所	公
	福島 新治			
85	藤沢 忍	177	東京都練馬区石神井台2-5-25あたご荘F-2	03-5372-1159
82	藤田 直利	436	静岡市掛川市和田1-8-2市営住宅201	0537-22-3940
	藤本 かすみ	440	豊橋市山田3番地70-2	
	藤原 葉子	508	中津川市中津川1010-201 1棟405 (旧姓 野村)	
81	星川 静穂	458	名古屋市緑区鳴海町大将ヶ根13-562 カルミングラントルツB棟507 (旧姓 天野)	052-623-5489
	細川 啓			
	堀川 敏彦			
	本田 昌司			
	本間 恵理子			
	松本 晴美			
95	水上 和江	474	愛知県大府市共和町1-11-16サロード 共和402	0562-48-8849
	水谷 誠治			
	三宅 治朗			
	宮本 映子			
95	武藤 伸子	457	名古屋市南区内田橋2-25-27 フォーブル内田橋205	052-692-5997
90	村上 英俊	514-01	三重県津市栗真町屋町1688	
84	森 千恵子	451	名古屋市西区名駅2-20-4 (旧姓 門脇)	052-581-0350
84	森下 敏嗣			
79	森本 真砂子	942	新潟県上越市五智3-05-14 (旧姓 野村)	
80	柳 政勝			
	柳原 哲夫			
77	矢吹 弘	173	東京都板橋区大谷口上町77-2	
88	安井 純代	630	奈良市六条1-22-4-1 (旧姓 上松瀬)	0742-45-8102
77	安田 洋子	343	埼玉県越谷市神明町2-94-8 (旧姓 馬場)	0489-65-2305
93	安野 めぐみ	465	名古屋市名東区つつじ丘301 5-410	052-775-3931
81	山崎 保	525	滋賀県守山市横江町222-7守山教職員住宅E-1	0775-83-5966
77	山本 志津夫	516-21	三重県度会郡度会町棚橋695-2 (旧姓 落合)	05966-2-0767
92	山本 孝博	742-11	山口県熊毛郡平生町佐賀2694	0820-58-1622
	山本 美智枝	567	大阪府茨木市上穗積3-3-28 (旧姓 田辺)	0726-24-0162
87	結城 雅子	810	福岡市中央区福浜2丁目2-D-404	092-732-5570
	横井 ゆう子			
85	吉岡 久夫	465	名古屋市名東区高社2-229-2高社Mツ311	052-776-5284
84	吉弘 雅人	593	大阪府堺市鳳北町8-454-2	0722-61-8599
	渡辺 裕久			

日本福祉大学Ⅱ部山岳部現役名簿

1995年現在

学年	氏 名	〒	現 住 所	☎
4	大西 君枝	475	半田市花園町1-10-1清風苑10号室	0569-23-4024 (呼)
4	児玉 多真美	470-33	南知多町内海中前田148コ-ボ 久工門105	0569-62-2597
4	田那波 由希	470-32	美浜町奥田北大西14ハイツユタカ203	0569-87-3027(203)
4	西崎 史人	470-32	美浜町奥田石畠260-2すみれ寮2号	0569-88-5281(104)
4	深津 孝宏	470-32	美浜町奥田三ヶ市31コ-ボ丸西2号-1	0569-87-3920
4	松本 充生	470-23	武豊町道崎6-2浜川荘2号室	0569-72-1306
3	黒田 山彦	470-32	美浜町野間若松66コ-ボ やぶや15号	0569-87-5204
3	砂原 奈美子	475	半田市星崎町2-207-2タービレスマリエ310号	0569-26-5039
3	堀川 尚美	470-32	美浜町奥田森越13コ-ボ 市村208	0569-87-1876
3	山本 武弘	470-32	美浜町奥田外面98-1第2丸谷荘107	0569-87-3619
2	田口 剛	470-32	美浜町奥田西卯起58-3石川マション203-1	0569-87-5324
1	小澤 由紀	470-32	美浜町奥田議路321-2コ-ボ カドタ106	0569-87-3854
1	片桐 幸代	470-32	美浜町三ヶ市82-2渡辺アパート106	0569-87-3660(106)
1	渋谷 香	475	半田市青山町4-4-1ワウ青山3E	0569-26-0441
1	長井 ゆき	470-32	美浜町奥田石亀93清和寮南313号	0569-87-2485 (呼)
1	長嶋 初重	475	半田市天神町54キャスルハウス田園101	0569-22-6587

95年度卒業生の卒業後の連絡先

	氏 名	〒	住 所	☎
	大西 君枝	440	豊橋市西岩田3丁目14-1	053-63-3489
	児玉 多真美	949-71	新潟県南魚沼郡六日町五日町2198-1	0257-76-3666
	田那波 由希	114	東京都北区豊島3-28-8	03-3912-5962
	西崎 史人	703	岡山県岡山市四御神414-5	0862-79-3528
	深津 孝宏	370	群馬県高崎市八幡町917-2	0273-43-6124
	松本 充生	223	神奈川県横浜市港北区下田町2-15-8	045-561-7985

編集後記

四半世紀おめでとう！

「25周年」というより「30周年」とした方が早いような気がしたが、「25周年」にこだわるところが、このII部山岳部らしいとすごく思う。

そんなこの部に入ったばかりの頃、よくイライラしたものだ(今でもかなりもどかしいが)。なにはともあれ私も一部員です。このII部山岳部を愛し、愛されるよう育てていきたいと思います。

最後になりましたが、突然の電話での原稿の催促をいたしましたことをお詫び申し上げます。また、原稿をお寄せ下さった方などご協力ありがとうございました。

(一年小澤)

昨年度は山岳部の創部25周年にあたり、先輩OBの方からのご要望も受け、昨年度の後記に在部生でも話し合い、今年度の年間計画として記念誌作成を組み入れてきました。編集委員が代表で関わってきましたが、在部生にも協力してもらい、原稿依頼やお寄せいただいた原稿のワープロ化等を手伝ってもらいました。

記念誌の内容については、とても不十分なもので、先輩OB・OGの方々には、資金面で多額の援助を受けているにも関わらず、期待に応えられる内容ではないと申し訳なく思います。しかし、未熟ながら私たちがこの作成の機会を得られ、今こうして完成しようとしている段階にたどりつけた事大変うれしく思います。

この記念誌が皆様に一読していただき、いろんな事を感じていただけたらと願っています。

(3年堀川)

(編集委員)

OB代表者：吉岡久夫

部員：松本充生 田口剛 山本武弘

小澤由紀 堀川尚美

「無名峰」創部25周年記念誌

印刷日 1995年12月

発行日 1996年 1月

発行 日本福祉大学II部山岳部

☎470-32

愛知県知多郡美浜町奥田

学生会館 サークル室3

☎0569-87-2482

創部25周年を祝う会寄付(1995年3/1~12/15現在)として次の
方々に、この記念誌発刊にむけての御援助を頂きました。

(敬称略・順不同)

藤田直利、星川静穂、木村久世、岡田忠・由岐子、猪又康行、加藤康則

滝口豊之、森千恵子、佐藤ひとみ、川田良彦・信美、竹腰順子

窪田陽子、矢吹弘、秋山ゆう子、鈴木宏・康子、藤沢忍

風間淑子、竹腰裕泰、片桐治、柏原一彦、西直隆、吉弘雅人

吉岡久夫、亀井孝子、懸武子 塚山久美子

以上の皆様、ご協力誠にありがとうございました。